

刃は儂き未来の為に

ウンガロ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

鬼舞辻無惨との戦いは終わり、痣の代償により天寿を全うした炭治郎。しかし奇妙な夢を介し、行き着いた先は冥府ではなく家族を失ったあの日の夜だった。

もう誰も死なせたくない。自分が無力なために命を散らしていった者たちを救いたい。その一心で炭治郎は鬼との戦いへと再び身を委ねた。

※歌詞引用に際するハーメルンの禁止事項に当たる御指摘を受けてタイトル・サブタイトルを変更しました。

目次

別離	1
前だけ向いて進め	10
強くなる為に	19
再縁	27
生まれ持った責務	35
最終選別	45
救いの刃	54
炭治郎の考え事	63
いざ浅草	70
上弦の式	80
世渡り上手	90

別離

戦いは終わった。

平安の世から大正にかけて千年にも及ぶ人と鬼との因縁は、数多の犠牲と鬼の首魁である鬼舞辻無惨の死によって幕を下ろした。

その血で涙を拭う激戦を人々は知らない。鬼によって齎された数えるのも億劫になる程の悲劇を知る由もない。

だがそれで良いのだ。

平和の立役者たる鬼殺隊は密やかに解散し、類稀なる才を持った剣士達は姿を消した。それに伴い代々受け継がれてきた『呼吸』も徐々に途絶えるだろう。鬼はもういないのだから、必然的にその必要性は薄れていく。

そんな一抹の寂しさとともに鬼殺隊の剣士達は、残された余暇を過ごしていた。

最終決戦にて戦鬪の中核を為した竈門炭治郎もまた、その一人だ。仲間や愛する者とともに、これまでの苦難を振り払うかのように幸せに暮らしていた。

元風柱の不死川実弥が死んだ。

鎧鴉が教えてくれた。

今頃黄泉の国で玄弥や、亡き別れた家族達と再会できただろうか。

元水柱の富岡義勇が死んだ。

鎧鴉が来る前に師匠である鱗滝左近次が教えてくれた。恐らく、彼が看取ったのか。

気難しい性格をしている義勇だが、錆兎なら上手くやっていけるだろうと思う。

痣が発現した者は洩れなく齡二十五にて死ぬ。

その事はお館様であった産屋敷耀哉の妻、産屋敷あまねから又聞きしている。

身体能力を著しく向上させる痣。だが代償は大きい、ということだ。所詮は寿命の前借りであり、人間の身で逃れる術はない。

人の至宝とも言える柱達においても例外ではなかった。あの鬼殺隊最強だった岩柱、悲鳴嶼行冥ですらその摂理には逆らえなかった。そして炭治郎は思うのだ。

次は自分の番なのだ。月日を追うごとに弱々しく影を帯びていく己の内の炎を感じながら、冷静に、和やかに。

微睡に落ちた炭治郎は最期の刻を思い返していた。

禰豆子、善逸、伊之助、カナヲ……みんな悲しんでいた。そんな思いをさせている事に申し訳なさを感じつつも、これは当然のことなのだと言つてやるしかなかった。

幸せだった。満ち足りていた。

志半ばに倒れていった柱や仲間たち、先人たちに比べれば、自分は余りにも恵まれ過ぎている。

仇を討ち、妹を救い、かけがえの無い者を得た。

これ以上に何を望もうというのか。

満足だ。満足……。

一瞬の脱力感の後、宙に浮かんだような気がした。

◆

炭治郎の前に一人の男が立っていた。

見覚えがある。

継国縁壺。鬼殺隊士において最も重きを為す『呼吸』を生み出した始祖。人の理から逸脱した傑物であり、それでいて竈門家における恩人でもある。

(走馬灯にしてはヤケにはつきりしているな……)

そんな事をぼんやりと考える。

夢か、幻か。少なくとも現実では無いだろう。例えるなら、無惨と最期に話した藤の花咲き誇るあの空間。あれに近しく感じた。

思えば竈門炭吉としてではなく、竈門炭治郎の身体で彼と向き合うのは初めてだ。彼にも常々御礼を言いたいと思っていたので、その願いが通じて死ぬ前の夢として現れたのかと、一人納得した。

物静かで素朴な彼は、やはり何も言わずこちらを見つめているだけだった。変化の乏しい表情。それでもその胸の内には万感の思いが込み上げていた。匂いで分かる。

「縁壺さん。貴方の導きのおかげで、俺は……俺たちは無惨を倒す事ができました。貴方の為した事は全て無駄じゃなかった！」

「――」

「価値のない人間だなんて言わないでください！ 縁壺さんのおかげで炭吉さんは、俺はこうして生まれて、安らかに死ぬ事ができました。たくさんの人を救う事ができたんです」

ありがとうございます。

伝え切れないほどたくさん感謝を、それでもなんとか伝えようと口にする。

そして初めて、縁壺は口を開いた。

「すまない……炭治郎」

「え？」

「それでもやはり、私はあの時無惨を斬り殺さねばならなかった。今こうしてお前と話して、やはり私は……後悔している」

ああ、やめてくれ。

自分のことそんなふうに言わないでくれ。

「人の想い……皆の願い……お前はそれを全てを一身に背負い、進み続けた。素晴らしい事だ。お前は私とは違う。やり抜いた」

「でもそれは縁壺さんのおかげで――」

「違う、違うのだ」

この時炭治郎は、自分と縁壺の間にある大きな認識のズレに気付いた。縁壺が己の事を卑下するのは夢の通り。だが同時に彼は、自分の事を憐れんでもいた。

その理由がどうしても分からない。

「いいか炭治郎。目が覚めたらまず、具ぐに状況を確認して欲しい。夢

だとか幻だとか、そんな事を思っではいけない。何故ならそれは紛れもない現実だからだ。受け入れ難くとも、その迷いに費やす時間の事を思い、すぐに行動しなくてはならない」

「何を言っ……？」

「無責任なのは承知の上。だから私は侘びなければならぬのだ。……どんなに苦しくても進み続けるしかない。私などに言われなくても分かっていると思う。だがひとつだけ覚えていて欲しい」

少しの静寂があたりを包む。

「お前はきつとこれからもありとあらゆるモノを連れて進んで行くのだろう。再三言うが、それは素晴らしい事だ。賞賛に値する。——だが、一人では限界がある。それを忘れてくれるな」

「は、はい。わかりました」

ひとまずこう言う他あるまい。若干戸惑いながらも、決意を込めた声音で答える。縁壺の言っている事は何一つ間違っちゃいない。まだまだ聞きたいことは沢山あるけれど、今言われた事を肝に銘じるのは悪い事じゃないはずだ。

と、ふとした拍子に視界が揺らぐ。ぼんやりと浮かんでいた縁壺の顔が更にぼやけていく。眠りの中で眠りに堕ちるような奇妙な感覚だった。

今から覚醒するのか。

それとも死後の世界が待っているのか。

いざその時を前にすると、覚悟していたはずなのになんだか震えてくる。だが縁壺の言っていた事も気になる。目が覚めたら、それは現実だと思っ……て行動しろと。

「よ、縁壺さん！ 聞きたい事が！」

「炭治郎」——いつかに聞いたかもしれないが、道を極めた者が辿り着く場所はいつとも同じだ」

何を言っ……ても通じない。

もしかすると、最初から自分の声は殆ど縁壺に伝わっていなかったのかもしれない。

もうダメだ。意識が遠くなる。

「……もし、お前が許してくれるなら——」

ボソボソと辛うじて聞こえる程度に呟く縁吉。

それを最後に、炭治郎の意識は闇に沈んだ。

◆*

「——待って縁吉さんっ！」

掛けられていた布団を蹴っ飛ばし、前にいたはずの恩人へと手を伸ばす。しかしそれは虚しく空を切り、代わりに炭治郎を迎えたのは見慣れない景色。ただ知らないわけではない。和紙と糊、竹の匂い。

と、聞き覚えのある声が炭治郎に呼び掛ける。

「おおどうした炭治郎。そんな慌てて飛び起きて。何か悪い夢でも見たか？」

「……三郎爺さん？　なんでここに」

「なんでもなにも此処は儂ん家じゃ。寝ぼけとるんじやろう。またまだ夜は深いからゆつくり休むといい。明日早起きして家に帰らにやいかんのだろう？」

「いや、俺は家で……」

瞬間、頭の中を強烈な既視感が埋め尽くす。忘れるはずがない、断じて忘れてなるものか。今でも腹が煮え繰り返るほどの痛みと怒り。

あの日ほど自分を憎んだ日はあるまい。家族を殺され、妹を鬼にされ、刃を握る決心をしたあの日のことを。

だから一瞬で分かったのだ。

今自分がいるのはあの時なのだ。困惑よりも先に全身の血液が沸騰していると錯覚するほどの激しい怒りが身体を突き動かした。

『受け入れ難くとも、その迷いに費やす時間の事を思い、すぐに行動しなくてはならない』

(縁吉さんはこの事を言いたかったのか!?)

愛用の市松模様の羽織だけ手に取り、炭を売って手に入れたのであろう銭の入った籠すら置いて慌ただしく駆け出す。背後から三郎の制止する声が何度も聞こえるが、それすらも振り切った。

雪がしんしんと降り積もる山道を全力で疾駆し、一目散に生家を目指した。

普通に考えれば、今自分の身に起きている事は尋常な事ではない。このような経験は前にもあった。無限列車にて下弦の壺と称されし鬼、魘夢と戦闘した際に奴の血鬼術で見せられた偽りの未来。悪夢。今回のこれも似たような血鬼術を受けている故の産物である可能性は否定できない。

だが寧ろ、その経験が炭治郎をさらに強く突き動かす要因となった。あくまで感覚的な問題にはなるのだが、何故だかあの時とは違くと断言できた。

過去へと逆行。追体験。滑稽話に出てきそうな無理のある仮説だが、現状そうとしか思えなかった。

事前に縁壺からその旨を伝えられていた事も大きい。

「ハッ……ハッ……！」

呼吸をするたびに肺がキリキリ痛む。冷たく乾燥した空気が肺胞を傷付けている。

体調が万全ならこの程度訳ない筈なのに。

理由は簡単だ。この時の自分の身体があまりにも脆弱すぎるのだ。鬼の存在も知らずぬくぬくと暮らしていたしがない炭焼きの倅である。全集中”常中”どころか、通常のものですらままならない。

（しっかりしろ炭治郎！　ここで走らずしていつ走るんだ！　動けっ！　走れっ！）

今こうしている間にも無惨は近付いてきているのかもしれない。今まさに、みんなが殺されているのかもしれない。もう、終わってしまった後なのかもしれない。

諦めるな。

ここで力を出し切らねば一生、それどころか死んだ後も後悔する事になる。

徐々に強くなっていく強烈な鬼の匂いを浴びながら、血の匂いよどうかしないでくれと願いながら。炭治郎はひたすら駆けた。

今際の時、炭治郎は自らの人生を振り返って『満足』と感じた。そ

う感じていると思うようにした。

何が満足だ。家族を殺されず、仲間達は誰も死なず、鬼を滅するのが最高の形である。それ以外に満足なんて存在して良いはずがない。だが過ぎ去った過去を取り戻す事はできない。故に、振り切るしかなかった。

此処で家族を助ける事ができるのなら、この命を捨てる事すら顧みない。みんなにあった確かな未来に続きを与えられるのなら。

途中、自分がかつて切り倒した株に刺さった手斧を抜き取り、羽織に隠す。日輪刀に比べれば性能は格段に落ちる。それこそ天と地の差だ。

それでも今用意できるのはこれが精一杯。この手斧であの鬼舞辻無惨を倒すのだ。いや最悪の場合、倒す必要はない。できるだけ長く時を稼ぐのだ。

勝てるか勝てないかで言えば、絶対に無理だ。それどころか数秒保つかすら怪しい。

柱も含めた鬼殺隊総戦力を以て尚、一分一秒を稼ぐために数多の隊士達はその命を投げ出していった。それほどまでに強いのだ。鬼舞辻無惨という怪物は。

しかし臆してなるものか。

退いてなるものか。

駆けて、駆けて——肺の奥から水の転がるような音がした瞬間、えずきが止まらなくなった。泡混じりの血が口の端から純白の雪へと滴り落ちる。

止まるな炭治郎。家はもう目の前だ。

……この血の匂いはそうじゃない。違う筈。

そう自分に言い聞かせながら、身体を引きずるように前は前へと足を踏み出した。

そして眼前へと視線を向け——大量の血痕が雪を染め上げていた。紅い彼岸花が咲き誇っているのかと見紛うほどに。

それを前にして立ち尽くす男は嘲るように、力無く雪に沈む傷だら

けの家族達を見下ろすのだ。

六太 彌豆子
弟と妹を同時に貫いたのだろう、伸縮する己の腕を高速で収納していた。

「ね……ずこ……」

「ねえ、ちゃん……」

母や弟、妹達の悲痛な叫びが炭治郎の頭を大きく揺らした。血液の巡りが早くなり、心臓の心拍数が加速的に増大していく。

「この程度の血の注入で死ぬとは」

心底落胆したような声音で男は呟く。

「太陽を克服する鬼などそうそう作れたものではないな」

母ちゃん。

花子。

竹雄。

茂。

六太。

……彌豆子。

みんなまだ生きている。でも傷付いている。混入した鬼舞辻の血が少量であれば人は忽ち鬼となり、許容力を越えれば一瞬で死に至らしめる。

彌豆子、みんな、また守れなかった。

また間に合わなかった。

今度は知っていたのに。

「ツ……ツツ……」

涙が止まらない。あまりの脱力感に、己への不甲斐なさに……——目の前の男への筆舌に尽くし難い激情に。握り締めた手斧の柄から血が滴り落ち、噛み締める歯茎の肉が爆ぜる。

あの男は二度も自分の家族を奪ったのだ。何にも代え難い、最愛の家族を。二度も。

そしてまた手に掛けようとしている。

——おのれ。

(ちくしょう……ちくしょうちくしょう!!)

悲鳴を上げる脳内の危機信号を無視して頭から突っ込んだ。もはや炭治郎の頭の中には男を倒す以外の選択肢は無かったのだ。

初めから分かっていたと言わんばかりに、男は振り向きざまに腕を鞭のように振るい、木の葉を払うかのように我が身を抉らんとする。自らの肉体の一部であるため、その動作は頗る緻密。

だが炭治郎は躲してみせた。

脆弱な肉体の身で、特別な目だけを頼りに。

「鬼舞辻イツ無惨ツツツ!!」

目を見開く無惨を他所に炭治郎の呼吸は練り上げられていた。流動性のある血液が口から勢いよく流れていくが、気にしない。

斬ってやる。滅してやる。

みんなの無念を、晴らしてやる。

——ヒノカミ神楽 円舞

横薙ぎに放たれた一閃、円環の始まりを象徴する斬撃が、無惨を斬り払う。

過去と今、全ての因縁を象徴する円舞は、同時に、炭治郎へと課せられた更なる試練の始まりを告げる狼煙でもあった。

前だけ向いて進め

(なんなのだこの餓鬼は)

胸を抉る横薙ぎの一閃。灼ける痛みは無いが、かつての記憶トラウマを思い起こさせるだけなら十分な威力。怒りよりも先に、焦燥と困惑が先行した。

自分の足取りを探る鬼殺隊の連中を躲しつつ、こんな辺鄙な場所までわざわざ自ら出向いてやったのだ。長年の悲願と永劫の安全を秤にかけて、ギリギリ自分が納得できるラインでの慎ましい行動だったはずだ。

(何故だ。ふざけるな。何故、こんな場所であの男を思い出さねばならんのだ)

——命を何だと思っている？

(鬱陶しい、煩い、黙れッ！)

背から数本の細い管が生え出た。腕による鞭打より威力は数段落ちるものの、人間を相手取るには十分過ぎる。さらにその数は余りにも驚異的。

初見殺しにも優れており、どれだけ集中していたとしてもそれを予め予見する事はほぼ不可能であろう。

だが炭治郎は知っていた。さらには見えていた。

無惨による不意打ちすらも身を振りながら跳躍することで何とかギリギリのところで回避し、更なる型へと技を繋げる。

—— ヒノカミ神楽 碧羅の天

—— ヒノカミ神楽 烈日紅鏡

垂直方向の強烈な斬撃は無惨の管を全て叩き落とし、間髪を入れず懐へ手斧を素早く振るう。日輪刀であれば切断に至っていただろう。慢心動揺と、要因は多々あるだろうが、無惨らしからぬミスだった事は間違いない。

無惨を驚愕させたのは炭治郎の使っていた得物が只の手斧であった事、そして微かな音を鳴らし宙を揺蕩う太陽を模した耳飾り。

嫌でもあの化け物に姿が重なってしまう。技は稚拙で動きも貧弱。冷静に対処すればすぐにでも殺せる筈なのだ。

だが、万が一。万が一にでも、目の前の餓鬼が縁壺と同じ類の化け物である可能性があるのなら……。

無惨は背を向け逃げた。

あまりにも決断が早すぎる。まさか今の自分を前にしても逃げ出すのかと、無惨の性質を把握している炭治郎ですら呆気に取られかけた。

だが許してなるものか。

(無惨が逃げる……ッ！)

素の脚力では決して敵わない。まだ距離の開いていない今しか、奴に攻撃を叩き込む事はできないのだ。

一撃で仕留める事はまず不可能。ならば、奴の足を止める他に選択の余地はない。

陽華突——いや、手斧で刺突は無理だ。リーチも足りなかった。

炭治郎に残されたのは投擲による切断のみ。

昔から何かと投擲が得意だった炭治郎。数多の鬼達との戦闘においても大一番の場面で活躍してきた攻撃方法の一つだ。

柄先を掴み大きく振りかぶる。手を離れた斧は勢いよく回転しながら無惨へと迫る。

狙いは脚。無惨の機動力を削ぐのだから脚一本くらい切断しないと話にならない。

逃がさない、絶対に。

「逃げるなああッ！ 戦ええええ!!!」

斧は炭治郎の狙い通り、寸分違わず無惨の裏太腿を捉えた。今打てる全ての手段を駆使した最高の追撃だった。それは間違いない。

だがそれでも、不可能なものとは不可能。これが現時点での炭治郎の限界である。

刃は無惨の肉に食い込む事なく砕け散った。

あまりに残酷な幕切れだった。

「そんな……！」

呼吸でブーストのかかった斬撃なら兎も角、手から離れてしまえば無惨にとっては只の鉄屑に等しい。やはり炭治郎には全てが足りなかった。

無惨の背中がみるみる遠ざかっていく。吹雪のカーテンへと消えようとしている。

炭治郎はそれを見送るしかなかった。

「鬼舞辻無惨！ 貴様だけは何度殺そうが、何度生まれ変わろうが絶対に許さない！」

既に肺も喉もズタズタだ。呼吸すら満足にままならない。それでも炭治郎は嗚咽混じりに叫び続けた。無惨の匂いが消えるまで、ずっと。

「もうお前の好きにはさせない！ させてなるものか！ 何度逃げ果せようとも、俺はお前をどこまでだって追い掛ける！ 絶対に、好きにさせるもんかつ！」

これから無惨は——配下の鬼達は、柱を始めとした自分の大切な人達を殺していく。

煉獄さん、しのぶさん、時透くん、玄弥、悲鳴嶼さん、甘露寺さん、伊黒さん、珠世さん……お館様にその家族、同じ釜の飯を食べた仲間達、罪なき一般人。

あまりに多すぎる。

無惨さえいなければ、彼等にもまた『明日』があつた筈なのだ。奪われずに済んだ筈の未来。

今死にゆく家族だつて——。

「俺は一人でも多く救つてみせるぞ！ お前がどれだけ策を弄そうと、その全てを乗り越える！ 覚えてろ！ 忘れるな無惨！ 俺は今お前が殺した家族の長男だ！ 竈門炭治郎！ お前を殺す者の、名前だッ!!!」

もう聞こえてはいまい。

声が届いていたとしても、無惨が意に介す事はない。

それでも叫びたかった。それしかこの怒りと無力感を振り切る方法がなかったから。

只管、泣き叫ぶしか。

「ごめんなあみんな……俺が弱いばかりに、ごめんなあ……」

母と竹雄の手を握りながら涙ながらに語り掛ける。既に六太、茂、花子は事切れており、禰豆子は昏睡状態に陥っている。鬼に変えられている最中なのだろう。

今際の時を見守る事すら出来なかった事に、炭治郎はまたもや絶望を感じた。

「……姉ちゃんがさ」

「竹雄？」

「いきなり飛び起きたと思ったら、俺たちを見て急に泣き始めたんだよ。それで戸惑っちゃってさ、しかも姉ちゃん、今すぐ起きて逃げるって、言い出して」

最初、竹雄が何を言ってるのか要領を得なかった。

だが確かに、言われてみれば家族が襲撃されている場所がやや違う。本来なら禰豆子と六太を除いて、他の皆は家屋の中で殺されていた。だがここは屋外、庭先だ。

そしてその原因は、禰豆子が注意喚起を始めたからだ、と竹雄は言う。

「姉ちゃんの言う事、すぐ聞けば良かった……。みんなを連れて逃げれば、こんな事には……。ごめん、兄ちゃん。俺、みんな、守れ……」
「ああ、竹雄。そんなこと言うな。お前は強くて優しい子だ。ありがとうな……。ごめんな。本当にごめんな……」

竹雄の目から光が消えた。

そつと頬を優しく撫でた後、母へと視線を向ける。自分が腹を痛めて産んだ最愛の子供達が一人と一人と死んでいく様を、瀕死の状態で見ているのだろう。

なんとという地獄だろうか。母親のことを思うと、自分のこの辛さす

らちっぽけな物に思えてしまう。

彼女もまた、事切れる寸前だった。

「炭治郎……まるで、お父さんみたいだったわ」

「俺、父さんの代わりにみんなを守ろうって、決めてたのに……守れなかったよ。ごめんよ、出来損ないの長男で……！」

炭治郎の懺悔を母は頬に手を当てる事によって諫めた。そして継り付くように言うのだ。

「置き去りにしてごめんね、炭治郎。彌豆子を、頼むわね……」

夜が明ける前に、家族の埋葬を済ませた。結局何も変えられなかった事を悔やみ抜きながら、何度目か分からない涙を流しながら。

途中、意識の覚醒した彌豆子に襲われかけたが、やはり彌豆子は炭治郎を食うには至らなかった。やがては呼び掛けに応じて大人しくなり、家族の墓前にちよこんと座っている。

彌豆子の為に竹製の口枷を作っている最中、炭治郎は一つの事について考え込んでいた。というのも、竹雄が最期に言い残した言葉についてだ。

（彌豆子は家からみんなを逃がそうとしていた。恐らく、鬼舞辻の襲来を予め知ってたんだ。……俺と同じく、彌豆子にも未来の記憶が？）

判断材料があまりにも少ないが、こう考えるのが一番納得できた。しかし何故彼女にも記憶があったのだろう。他の家族や無惨には無いように見えた。

いや、そもそも今自分の身に起きている現象自体があまりにも不明瞭。一応の仮説としては自分の人生を逆行したと定めたが、あくまでも仮定。考察の余地はある。

取り敢えず「偉かったなあ、彌豆子」と。褒めそやしつつ彌豆子の頭を撫でながら、さらに考えを深めた。

なんにせよ、原因の究明には自分一人だけの力じゃ不可能だろう。それこそ有識者として知恵が必要だ。珠世やその付き人である愈史

郎と接触できれば、何か情報を得られるかもしれない。

と、その前に——あの人が居る。

やはり、今回も来てくれた。自分の兄弟子であり、最後まで頼れる存在だった水柱。

音もなく背後に佇んでいたのは富岡義勇その人だった。読み取りづらい表情で自分と禰豆子、そして家族の墓を交互に見ている。

こうしてまた義勇と会えた事は、疲弊し切っていた炭治郎の心に僅かな温もりを与えてくれた。ただただ単純に嬉しかった。

「その女は……鬼か」

「そうです、妹は鬼にされました。でも人は食べません！ 本当です」
「信じられない。その墓は家族の物か。妹が殺したのではないのか？」

「違います。家族を殺したのは……鬼舞辻無惨。妹を鬼にしたのも、そいつです。この目でしかと見ました」

僅かに目を見開く。

この少年……やけに鬼についての知識がある。鬼舞辻の名前も知っている。いや、そもそも何故この少年は無惨と相対して生き残っているのか。それが分からない。現鬼殺隊の隊士に鬼舞辻と接触した者はおらず、というのも隠匿する奴との接触は現状ほぼ不可能であり、出会えたとしても生きて帰った者はいないのだ。

もし目の前の少年が真実を話しているのだとしたら、それは鬼殺隊にとって値千金の情報になるだろう。

だが喋る事が嫌いな義勇である。取り敢えず今やるべき事を先に為そうと刀を抜いた。

それに反応して禰豆子が炭治郎を庇うように前に進み出ようとするので、炭治郎はそれを必死に腕で制していた。

「人を喰わない鬼などいない。だから鬼の首は刎ねなければならぬい。お前の妹も、勿論例外ではない。それが俺の仕事だ」

「禰豆子が例外でなければ、今頃俺は喰われて死んでいる筈です。俺が今も生きている事が、何よりの証左です。……禰豆子は他の鬼とは違う」

「――」
鬼気迫る勢いで時折咳き込み吐血しながらも炭治郎は必死に義勇へと訴えた。禰豆子は心配そうに寄り添うだけ。

そう言つて鬼に食われた人間は星の数ほどいる。実際に見たことすらある。特に鬼になつた直後は極度の飢餓状態にある事が普通。一番に狙われるのは家族だ。栄養価が高いから。

しかも禰豆子は怪我を負っている。傷が治っていないのを見るに、鬼に成り立てなのだろう。すぐにでも人の血肉にありつきたいだろうに。

それでも人を喰おうとする素振りすら見せないのは、確かに尋常ではない。

流石の富岡もこれには考える時間を要した。炭治郎の言い分には一理ある。だが、禰豆子が人を喰つてからでは遅いのだ。

「……仮に俺がお前の妹を見逃すでしょう。その後、お前はとうするつもりだ？ 鬼である妹を山奥にでも隠しておくつもりか」

「禰豆子と俺はいつでも一緒だ。一緒に鬼舞辻を倒します！ そして禰豆子を人間に戻す！」

「言うだけなら簡単だ。お前が口にした道は険しいどころの話ではない。我々――鬼殺隊も簡単には受け入れられないだろう。それは理解しているのか？」

「勿論です」

即答であつた。

現に炭治郎はその辛さを何度も味わっている。刀を握つてからは地獄の毎日だ。

今でこそ尊敬している柱の面々だが、彼等ですらほぼ満場一致で「禰豆子は処断すべし」との決断を初対面時には下している。

信頼とは時間と実績をかけて積み上げていくものだ。それをまた一からとなると、やはり生半可なことではない。

それら全てを完全に理解したうえで、炭治郎は言い切つた。即答したのだ。

義勇もまた凄腕の剣士である。

貧相な筈の炭治郎から感じる、得も言われない雰囲気感に感心していた。今言ってる事がハツタリでない事も分かる。それに何故だか炭治郎は初対面である筈の自分を信頼しているような節があり、少しばかり戸惑ってモいた。

変わった兄妹だ。人を喰わない鬼、雰囲気だけは一丁前の見込みある子供。予感めいたモノを感じざるを得なかった。

それどころか、彼ならば空席になつてゐる水柱を埋める事ができるかもしれないと、心すら躍らせていた。

「……分かった」

義勇は刀を収めた。

「お前を信じよう。名前は？」

「あ、竈門炭治郎です。えっと、ありがとうございます。信じてくれて」

「……お前は鬼について詳しくかった。ならば鬼殺隊について知識もあるだろう」

「ええ、それは。入隊するつもりですから」

「……そうか」

やはり義勇との会話は難しい。

「狭霧山の麓に住んでいる鱗滝左近次という老人を訪ねろ。富岡義勇に言われて来たと言え、悪いようにはされない」

そう言い残すと、義勇は瞬く間にその場から駆けて行ってしまった。一見無愛想のようではあるが根はとて誠実な人だ。

見ず知らずの自分達にここまで施しを与えてくれるのだから。炭治郎の心は感謝の気持ちでいっぱいだ。

深々と頭を下げた。

「……行くこうか。禰豆子」

「むー」

降り積もる雪を一步一步踏みしめる。途中、何度も生家と先程まで生きていた家族の墓を見ながら、悔しさを噛み締めて。

歯を食いしばれ。前を向け。

足を止めて蹲っても時間の流れは止まってくれない。ともに寄り添って悲しんではくれない。

振り返らずに進め、炭治郎。

前だけ向いて叫べ。

強くなる為に

ひとまず麓にて前回と同じように籠と竹組を購入して、禰豆子を背負い持ち運ぶための箱代わりとする。また羽織の中に包丁と手斧を隠し持つことで即席の武器とした。人々に誤解されそうな装備ではあるが、四の五の言う余裕はないのだ。

鱗滝の下に向かうだけなのに何故武器が必要なのか。答えは単純で、鬼を退治するからだ。前の時間で自分と禰豆子が初めて倒したと言っても過言ではない鬼、御堂で三人の人を食い殺していたあの鬼である。

自分が早く御堂に到着して鬼を倒してしまえば、あの人たちを助けられるかもしれないと思い、最低限の準備を整えて行動を起こしたのだ。

救える人間は救ってみせる。

自分が過去に戻った事で救われる人が増えるなら、それに越した事はない。なるべく多くの人に在った筈の未来を与えたい。

それがこの世界における炭治郎の行動理念だった。

結果としては上手くいった。

呼吸の力で山を駆け上り日没直後に御堂に到着。隠れ住んでいた鬼と戦闘になり、これを打ち破った。あとは斧で首を切り離し、木に吊るして固定すれば終わりだ。なお身体は崖下に叩き落とした。

じきに昇る日光があつた鬼を消滅させてくれるだろう。

血鬼術を使えない鬼相手だったとはいえ、今の状態で安全に勝利する事ができたのは僥倖と言える。禰豆子の手を借りずに倒せたのも大きい。前回は頼り切りだったから、今回こそしっかりと守ってあげたかった。

懐っこく身を寄せる禰豆子の頭を撫でる。

「上手くいってよかった。やっぱり日輪刀がないと万が一があるから

なあ。”常中”もままならないし、早く元の水準に身体を持っていかない」と

全集中の呼吸”常中”。あれを使えるのと使えないのでは雲泥の差だ。

何より、極めれば昨日の自分より確実に強くなれる。無惨や上弦の鬼達と戦うなら早期の習得が必須といえよう。

その為には身体と肺活量を鍛えなくては。

それと鱗滝か鋼鐵塚のどちらかから日輪刀を頂戴した後になるだろうが、どこかのタイミングで刀鍛冶の里に赴いて縁壺零式の中に隠されている日輪刀を受け取りたい。勿論、小鉄少年の許可を得てからになるが。

やはりあの刀が自分に一番馴染んでいる気がする。

それに加えて一人でも多くの人を救いたいから、やはり鬼殺隊への入隊もなるべく早い方がいい。あと柱を始めとした隊士達との友好を今まで以上に深めたいし、善逸や伊之助が平穩無事に暮らしているかも気になる。珠世さん達との接触も急務だ。それに——それに——……。

「やる事が多すぎる……！」

第二の人生らしきものが始まったばかりだというのに多忙が極まっている。あまりの過密さに目が回りそうだ。

炭治郎は自分の頬を軽く叩いた。ひとまず物事の順序を決めて一つずつしっかりこなしていくしかない。全てをやろうとしてどれかが疎かになつてしまえばそれこそ本末転倒というもの。

そんな事をぼんやりと考えている間に朝日が昇った。お堂に巣食っていた鬼は日光に焼かれて消失し、塵芥のみが残る。

「禰豆子。日光に当たると危ない。籠の中にお入り」

念のため日陰にて一緒に待機していたものの、万が一があるといけない。禰豆子を籠の中に戻し、ふと御堂の方へと目を向ける。

鬼が消滅する様子を炭治郎と同様に陰で見届けていたのだろう、天狗の面を付けた還暦を過ぎる程度の老人が御堂の裏から姿を現す。

その姿を認めた炭治郎は、地面に腰を下ろし、静かに居住まいを正

した。

「富岡義勇さんに紹介されて此処に来ました。俺たちのことをご存知でしょうか」

「うむ、義勇から話は受けてある。出迎えに来たところ鬼と戦っているのが見えた。随分と手慣れているようだな。傷一つ負うことなく鬼を殺すとは」

「……」

貴方のおかげです、と伝えたかった。それほどまでに鱗滝左近次という男への炭治郎の感謝と尊敬の念は強かった。

一瞬、自分の置かれていた状況の全てを話したくなる衝動に駆られたが、慌てて抑え込む。未来が分かるなどと宣い異常者と見做されては全てが終わりだ。

もつとも、察しのいい鱗滝の事だ。今のやり取りだけで炭治郎が何かを隠していることぐらい容易に把握しているだろう。

気を取り直すように炭治郎は口を開く。

「しかし今のままではいずれ鬼に殺され、仇を討つことなど夢のまた夢……。何卒、鬼殺の極意を伝授していただきたく——」

「炭治郎。妹が人を喰った時お前は どうする」

「禰豆子は人を食べません。決して」

不意打ち気味の質問だったが、炭治郎も即座に切り返した。しかしそれは回答ではない。

炭治郎と鱗滝の視線が交差し、辺りを沈黙が支配する。鱗滝からの圧を炭治郎は永劫不変の意思を示すかのように、気迫で押し返さんとする。

そして言葉を紡いだ。

「——もし万が一、禰豆子が人を喰ったなら、その時は俺が自らの手で禰豆子の首を斬り、俺自身も腹を切つて方々へとお詫びします」
覚悟は決まっている。とうの昔に。

(判断が早い)

大いに感心した。決断力に優れている。

鬼を不用意に痛め付けず、慈悲を以って倒す炭治郎の姿を鱗滝は観察していた。鬼狩りを生業とするには優し過ぎる気もするが、それもまた上手い具合に己の強さへと昇華している。

義勇からの手紙の通り、この兄妹は特別なようだ。

鬼殺の隊士としての資格は十二分にあると、既にこの時点で鱗滝は見抜いていた。

技術と才能の底も知れない。唯一認められる欠点としては、フィジカル面の弱さくらいか。

それはこれからの扱きで改善できるだろう。

軽く見積もって錆兎以来の逸材——若しくはそれ以上。この少年ならば最終選別を突破することも可能かもしれない。弟子の育成に關して深い絶望を感じていた鱗滝をしてそう思わせるほど、炭治郎には才が溢れていた。

「妹を背負って付いてこい。稽古を付ける」

「はい…」

願わくばこの小さな灯が、やがて数多の渦を巻き起こし、血塗られし歴史ごと鬼舞辻を飲み込まんことを。

鱗滝の家に居着いて十数日が経過した。

その間炭治郎が行っていたのは、只管刀を振るうことによる筋力強化と、呼吸の精度向上。元の身体とは未だ勝手の違う部分が多々あるので、それを一つずつ鱗滝が指摘、矯正していく。

なお岩割りの試練は課されなかったものの、炭治郎は定期的にあの大岩の場所まで足を運び、錆兎や真菰を始めとする亡き鱗滝一門への弔いを行なっている。

指導の必要が無いからか終ぞ彼等が姿を現す事はなかったが、時折背中を押される様な感触を受けるたび、炭治郎は嬉しくなった。

修行に話を戻すと、やはり急務となったのは筋肉と肺活量の増強であり、ある程度動けるようになるまで炭治郎は徹底的に扱かれた。その苛烈さは前世の比でない。

また、やはり彌豆子は昏睡してしまつたため、その世話にも尽力し

ている。この時鱗滝が行っていた暗示は彌豆子が人間に戻る上で必要な事だと炭治郎は思っていた。

そんな毎日を懸命に過ごしていたある日、炭治郎は鱗滝に呼び出される。

「炭治郎。お前も既に薄々分かっているだろうが、儂からお前に伝授する事は何もない。全集中の呼吸を習得し、刀を振る技術も身につけておる。水の呼吸の飲み込みも異常な程に早い。……何処で習ったのかは知らんがな」

「……」

思わず肩を揺らしてしまう。しかし鱗滝は深く追及しなかった。鬼や鬼殺隊と無縁の生活を送っていても、自然と全集中の呼吸に近い呼吸法を身に付ける一般人が現れるのは稀にある話だ。

「技は十分。よって儂がお前に施せるのは、身体の鍛え上げと、お前の育成方針に助言を付け加えることぐらいだ」

「助言、ですか」

「炭治郎、お前の適性が水と断定されたわけではない。もしかすると炎、若しくは風……ともすれば派生に行き着く事だつてある。儂とて確証は持てん。しかし、お前は既に自分の進む道を心得ているのではないか？」

「鱗滝さん……」

「お前が自分用の日輪刀を手にするのはもう少し後になろうが、予め準備を整える事は可能だ。儂はお前が信じた可能性を信じよう」

本来なら、鬼殺隊への入隊後に支給される日輪刀色変わりの刀によって自分の適性を見定めた後、それに合わせた訓練を行うのが普通だ。

だが鱗滝はその前倒しを提案した。生き急ぐ炭治郎の想いになんとか応えてやろうと、思案を繰り返した結果である。

「それに結局のところ基本の五流派のどれが適正だったとしても、皆が皆全く同じ呼吸を使っているわけではない。自分なりの改変を加え、己が最も使い易い形で呼吸を練り上げているのだ。これからの訓練は己の流派を独自に極める一助とせよ」

「は、はい」

最終選別までまだ時間がある。

打てば綿の如く教えを吸収していく炭治郎へと、できる限りを詰め込む気であるのだ。最終選別が半ばトラウマと化している鱗滝だからこそ、必死に炭治郎へと呼吸法の髓を叩き込もうとしていた。それが自分の手の届かない分野であったとしても。

「今一度確認する。炭治郎、お前が最も活力を出せるのは水の呼吸か？」

「……いえ。亡き父から受け継いだ”ヒノカミ神楽”が、一番力が出ます。負担は水の呼吸に比べて大きいですが、その代わり威力と技は格段に向上するので」

顎に手を当て思案する鱗滝。思い返すのは五流派のいずれにも当て嵌まらない——いや、むしろ五流派全ての面影を凝縮させたような不思議な呼吸と型。

「そうか。少し前に見せたあの型か。なるほど確かにあの型は強力。ただ独自性が強すぎる故、難もある。極めるとなれば先の見えぬ苦闘が始まろう」

鱗滝の言う通りだ。

ヒノカミ神楽は元来自分には不釣り合いな程に強力であり、完全に極めるのは炭治郎の才能では不可能に近い。縁壹が駆使した”日の呼吸”の領域に至るにはどれだけの年月をかければいいのか、想像もつかない。

だが炭治郎は諦めない。

ハナから縁壹を超える気などさらさら無く、兎に角がむしやらに彼の後を追い掛けて、小指一寸程度の距離が縮まれば万々歳だ。

自分がやらねばならぬ事は、己の限界を極める事のみ。”日の呼吸”を極める事でも、縁壹を超える事でもないのだから。

「父を始めとして、竈門の長兄が代々受け継いできた神楽です。家族の無念はこの舞で晴らしたいと思っています」

「……ならばその分さらに精進せねばならぬな。安心しろ。改善すべき点、そして改善する方法のあてならある」

鱗滝は膝を叩いて立ち上がる。

徐に戸棚を開き、中から取り出したのは和紙と筆。墨を素早く走らせ、あつという間に文言を書き上げると、鏝鴉に啞えさせて飛び立たせた。

「ヒノカミ神楽の強化について、儂に一つ案がある。数日待つのだ」

「わ、分かりました」

「無論、その間も休んではならぬ。睡眠時を除く全ての時間で山を走り続けよ、そして只管に刀を振るうのだ。お前が燻っている間にも人は喰われ続けている。この事を決して忘れるな」

「はー」

『略敬

煉獄槓寿郎殿

炎柱である其方に折り合つて頼みがあり、手紙を送付した次第。我が門弟に一人見込みある者がいる。未知の呼吸を使う少年に候。この少年へ何卒ご指導賜りたく、お願い申し上げます。

少年に足りぬ物を補うには、炎の呼吸に触れさせるのが一番であると判断致した。また其方でも何か新たな発見があるやもしれませぬ。

手前勝手な頼みであるとは重々承知の上。何卒御容赦を。

匆々

元水柱 鱗滝左近次』

『略敬

鱗滝左近次殿

まずは手紙にてご報告する事をお許し願いたい。父 煉獄槓寿郎は既に炎柱の座から退いております。怪我を負っている訳ではありませんが、見込みある少年への指導を行える状態でもございませぬ。

しかし申し出を断らせていただくのも心苦しく、もし宜しければ私にその役目を一任させていただきませぬでしょうか。共に切磋琢磨

する身として、全身全霊を以って期待に応えたい所存。

若い芽を育むことも柱として重要な責務でございますれば、時間は惜しくありません。

匆々

現炎柱 煉獄杏寿郎』

再縁

鱗滝の下で基礎能力の向上、及び技術の矯正訓練が始まって数日後、鏝鴉の返信が到着する。

何だ何だと様子を窺う炭治郎を他所に、鱗滝は手紙の内容を確認し、暫くの沈黙を経て大いに頷いた。満足のいく結果だったようだ。

そして改めて、ヒノカミ神楽を修めるにあたっての方針が鱗滝より示される。

「いいか。儂はこの数日お前の舞うヒノカミ神楽の吟味に努めていた。その上で確証の得られた内容のみ伝える事にする」

「はい！ ありがとうございます！」

「うむ。炭治郎、お前のヒノカミ神楽は水の呼吸に酷似している。つまり、独自の呼吸に水の呼吸を巧く統合させた型、だったな」

「ええその通りです」

ここまでは既に鱗滝に話している。

補足すると、ヒノカミ神楽の原型となる日の呼吸と、現在炭治郎が舞っているヒノカミ神楽は厳密には様々な部分が異なっており、水の呼吸がベースとなっている為、いわば炭治郎が独自に編み出した型になる。

また最終決戦時に夢を介して縁壱からオリジナルの日の呼吸を伝授されているが、痣や透き通る世界に到達し切れていない現時点での炭治郎の身体能力では再現不可能であり、失伝に近い状態である。

「型の数は水の呼吸より二つ増えている事で手数が多くなっている。更に多角的な斬撃、防御面、回避行動の取り易さ、どれを以つても非常に完成されており申し分ない。また所々に各五流派の技に似通った部分が散見されるな」

消耗という点を除けば、非常に優れた呼吸と型である。また、応用・発展へ繋げ易そうな、一言で言えば柔軟な型だった。事実、炭治郎は雷の呼吸をベースとして『円舞一閃』を生み出している。

「ここまでが良い点。」

「問題点としてはやはり消耗。これは型の特性上仕方ない事ではあるが、体力の底上げで改善が見込める。さらに精進しろ」

「肝に銘じますー！」

「どれだけ剣の道を極めたとしても、身体作りを疎かにしていない理由にはならない。やはりこれから、今と同じ水準の鍛錬を継続するかあるまい。」

「そして次が本題。」

「次に消耗の他に一つ——攻撃面に些か違和感がある。自覚しているか？」

「攻撃……」

指摘されるまで意識すらしていなかった。水の呼吸からヒノカミ神楽に切り替える事によって明らかに攻撃力は増していたし、相手を切断しきれない場面もあったがそれはいずれも上弦の鬼が相手である。

「特別攻撃力に難があるとは考えていなかった。」

「確かに水の呼吸に比べれば威力はある。生生流転以上の斬撃が繰り出せるのだから当然だ。しかし、他の分野での完成度に比べると、攻撃面は今ひとつと感じざるを得ない」

「それは……もしかして、俺のヒノカミ神楽には水の呼吸が色濃く残っているから、ということですか？」

「気付いたか。炭治郎」

水の呼吸は、それこそどんな形にもなれる水のように変幻自在な歩法が特徴であり、それによって如何なる敵にも対応できる受けの型。

しかし他の呼吸に比べると火力に難があるのは明白。それは水柱、並びに水の剣士達にとつて、永遠の課題とも言える難点だった。

炭治郎の脳裏に蘇る上弦の参 猯窩座との戦い。

奴の腕一本斬り落とすのに炭治郎はヒノカミ神楽を使用していたにも拘らず四苦八苦していた。しかし心の師である煉獄杏寿郎は、次から次に猯窩座の腕を斬り飛ばして表面上互角に渡り合っていた。

決して水の呼吸が劣っている訳ではない。しかしその攻撃面の脆

さがヒノカミ神楽にも如実に現れている結果となっている、と推測した。

黙り込んでしまう炭治郎。しかし鱗滝はいつものような厳粛な物言いではなく、優しい声音で炭治郎を諭した。

「案ずるな炭治郎。その為に儂は協力を仰いだのだ。水の呼吸で限界が生じるのであれば、他の呼吸に触れてみるのも一つの手だろう」

「あつ、鎧鴉に運ばせていた手紙はそういう事だったんですか！ けど……」

水の呼吸以外の指導を受ける。つまり、他の育手に炭治郎を託すという事。

だがそれは鱗滝との一時的な別れを意味し、同時に禰豆子と離れ離れになる、という事でもある。

流石に他の育手が全員禰豆子を受け入れてくれるかと言うと、決してそうではない。禰豆子が安静に、確実に眠ることのできる場所は、鱗滝の下以外には存在しないのだ。

当然、鱗滝は炭治郎の想いを理解している。

「禰豆子の事なら案ずるな。お前が帰ってくるまで儂が面倒を見る。経過も小まめに鎧鴉経由でお前宛に届けよう」

「鱗滝さん……ごめんなさい何から何まで」

「気にしなくていい。師ならば、弟子の大成を一心に願うのが当然だ。……一月半後に最終選別が始まるから、それを修行の一区切りとする。それまでに技を極限まで磨くのだ。儂の方にも顔を出すような」

「はい……」

ああ、やはりこの人が自分の師で良かった。炭治郎は深く頭を下げながら、何度目になるか分からない胸いつぱいの感謝を言葉として吐き出し続けた。

鱗滝はそれを聞いて、ただ相槌を打つように頷くだけだった。

数日後、髪を切り身嗜みを整えた炭治郎は狭霧山を下った。足取り

はしっかりとっていて、目と佇まいには活力が漲っている。修行の成果もあるだろうが、心理面での弾みが大きかった。

その理由は、昨夜鱗滝から伝えられた自分のこれからの師についてである。

炎柱 煉獄杏寿郎。

無限列車での激闘から炭治郎の体感として既に10年近く経過している。しかし、あの日の悔しさを片時たりとも忘れたことはない。

力の足りない自分を護るために彼は身を挺した。そして己の命と引き換えに炭治郎のみならず、二百数名の乗客を護り切った。

目の前で死なせてしまった。

だが杏寿郎から受け取った言葉と想いは、今も炭治郎の胸の中に生き続けていて、心を燃やし続けているのだ。

（煉獄さん……あの人が死ななければ、もっと悲しみのない世界になっていたかもしれない。俺なんかより生き残らなきゃいけない人だった）

当の本人がそれを聞けば、身を乗り出して否定するだろう。炭治郎とて杏寿郎に繋いでもらった命を無為にはしないと日々奮闘したものだ。

でもあんな場所で死んで良い人では無かったはずだ。絶対に。

そんな煉獄杏寿郎がわざわざ自分の指南役を引き受けてくれたのだ。気分が高揚しないはずがない。

鬼殺隊最強の一人から訓導を戴くことができる貴重な体験もそうだが、今のうちに関係を結ぶ事ができれば、杏寿郎との繋がりも自ずと深まるだろう。それが巡り巡って杏寿郎の死を回避する一因となるかもしれない。

（死なせない、絶対死なせてなるものか。煉獄さんには沢山助けてもらったんだ、今度は俺が助ける番だ！）

煉獄家は前の時間でも何回か訪れた事があるので、迷わずに一直線に辿り着けた。和風の屋敷をぐるりと囲む立派な塀。冬だというの

に心なしか暖かな陽気すら感じる。

「流石に勝手に入るのはダメだもんな。どう呼べばいいものか……」
大声を出して気付いてもらうのも一つの手だが、それだと未だ燻っているのだろう元炎柱の煉獄禎寿郎を刺激しかねない。前回のよう
に変に揉める事だけは避けたかった。

誰か居ないかと、門扉の陰からこそそこそと中を伺う。

何処からか微か声は聞こえるものの、詳しい場所までは特定できない。どうやら煉獄家の面々は屋内に居るようだった。

さて、やはりこっそりと中に入らせてもらう他ないだろうか、と。
炭治郎が足を一步踏み出す——その直前だった。
肩を優しく叩かれた。

「えっと、どうしたのかな？ 此処は煉獄さんっていう人の家なんだから……」

「あ、いえ——」

「キミ、やっぱり見るからに困ってそう！ なんでもお姉さんに相談してちょうだいね！ 可哀想な子は放っておけないから！」

見知った顔だった。

特徴的な毛髪に、鈴を転がしたような愛らしい笑顔。いつも自分たちに対して優しさを持って接してくれた。その類稀なる戦闘能力で上弦の肆や無惨との戦いで自分の窮地を何度も救ってくれた。

蛇柱 伊黒小芭内とともに無惨消滅を最期に散り果て、その死に目を看取る事さえ叶わなかった恩人。

甘露寺蜜璃
彼女もまた、救いたい一人だ。

(甘露寺さん……まさか此処で会えるなんて)

「あれ？もしかして私のこと知ってる？ お知り合いだったかしら」

「い、いえ初めましてです！ 俺、竈門炭治郎っていういます。煉獄杏寿郎さんに用があつてここに……」

「あら煉獄さんには？ あははごめんなさいね、ちょっと早とちりしちゃったみたい。煉獄さんに用つてことは、あなたもしかして鬼殺隊なの!？」

「まだです！ 一月半後の最終選別に向けて日々修練を積んでいます！ 煉獄さんにはその一環として稽古を付けてもらえる事になったので」

熱くなる目頭を意識しつつそう答えると、甘露寺は喜色を浮かべた。炭治郎の手を取り、ブンブン上下に振り回す。彼女の怪力に炭治郎の身体が大きく揺れる。

「なら私は先輩！ 私ね、ちよつと前まで煉獄さん師範に稽古を付けてもらってたの！」

「そうなんですか！」

「隊士としてはまだまだひよつこだけど、煉獄さんの教えのおかげでなんとかやれてるわ！ それにしても炭治郎君みたいな可愛い後輩ができるなんてとっても嬉しいわ！ 互いに頑張りましょうね！」

「はい頑張ります！」

そんな元気の良いやり取りを暫く交わした後、甘露寺の案内で杏寿郎の下まで連れて行ってもらう事になった。

またその途中に身の上話していると「そんな歳で家族を殺されて、しかも鬼と戦うなんて可哀想！」と泣かれたりするハプニングがあったが、それ以外にはこれといった事はなく、板張りの部屋へと通された。

「——もつと足腰に力を込めるんだ千寿郎！ 頑張れ！ そんな踏み込みでは鬼の攻撃を受けられないぞ！」

「は、はい兄上！」

ちようど兄弟で打ち込み稽古中だったようだ。

めげずに一生懸命に木刀を振るう千寿郎に、兄が応えるかのように何度も励ましの言葉を送る。心を奮わせている。

煉獄杏寿郎が生きている。

甘露寺蜜璃が生きている。

煉獄千寿郎が兄と懸命に暮らしている。

はらり、と。炭治郎の瞳から涙が溢れ出た。

それは決意を新たにした涙。

かつて在った過去と対面した炭治郎は、そのあまりの儂さに涙してしまったのだ。

自分の知っている二人はもう死んでいる。残された千寿郎は心に昏い影を落とし続けていた。彼等に訪れただろう輝く未来は存在しない筈だった。

でも此処ではまだそれは途絶えていない。

消えていった未来を自分の手で取り戻すことができる。

どうしたどうしたと、煉獄兄弟は稽古を中断して此方に歩み寄る。甘露寺はオロオロしながら兎に角炭治郎を励ましていた。

「どうしたのだ甘露寺！ その少年は？」

「それが、煉獄さんに師事しに来たって言うから案内したんですよお。そしたら急に……。ごめんね炭治郎君、何か辛い事でも思い出させちゃったかな？」

「なるほど！ この少年が！」

「すみません、お恥ずかしいところを……」

そう言いつつ涙を拭う。

炭治郎の家族が鬼の手によって惨殺された事を甘露寺は聞いていた。確か弟や妹たちもいた筈だ。仲睦まじい煉獄兄弟の姿を見て、かつての家族を思い出させてしまったのだろうと、涙の訳を解釈した。

一方で、状況が掴めない煉獄兄弟であるが、観察眼に優れた杏寿郎は涙に秘められた何かしらの想いを見逃さなかった。見逃せなかった。

「少年、咽び泣く事は何も恥ずかしくない！ 想いの発露が心を更に強くするんだ！ 我々として、鬼と戦う日々の中で何度涙を流したことが！」

「そうだよ炭治郎君！ 私だって初任務の時はいっぱい泣いちゃったから！」

なお杏寿郎が泣いた事は鬼殺の剣士になってから一度も無いのだが、それはあくまで杏寿郎の心が超人的なまでに成熟していたからだ。彼本人は涙を流す者の気持ちを中心に理解できていると信じて

いる。

泣く事は恥ずかしくない。泣くなら思う存分に咽び泣けと、そう伝えなかった。

「煉獄、さん」

「涙を流しながらでもいい！ 齒を喰いしばって進むんだ、少年！

悲しみに暮れていても時間はキミに寄り添ってはくれないのだから！ その涙を如何活かすのかが肝要だろう！」

「はい……頑張り、ます」

うむ！ と大きな声で頷き、先程の甘露寺同様に炭治郎の手を掴むと上下に振り回した。

やはり煉獄さんは凄い人だと思う。出会って数秒の自分にすら、こんなに心が奮い立つような言葉を掛けてくれるのだから。

こんな煉獄杏寿郎の姿こそ、炭治郎が長年追い求めてきた目標そのものだった。

「俺はキミを歓迎する！ 共に強くなろう溝口少年！」

「違います竈門です！ 竈門炭治郎！」

「おおそうか！ そういえば名前を聞いてなかったな！ いやはや済まなかった！ よろしくな竈門少年！」

花が咲いたように煉獄邸に笑いが溢れた。

彼等が戦っている領域、遥かなる高み。今度こそ、それに手を掛けてみせる。

貴方の隣で今度こそ、刀を握ってみせる。

笑顔の裏で凄絶な決意を新たに固める炭治郎だった。

生まれ持った責務

「炭治郎さんって本当に凄い人ですね」

「え？ そんな、どうしたの急に」

縁側で日光を浴びつつ千寿郎と共に休憩していた時、不意にそんな事を言われた。

自分のことを凄い奴だなんてちつとも思っていない炭治郎にとって、それは寝耳に水の話であった。首を傾げながら続きを促す。

「兄の稽古はとても厳しい事で有名らしくて、今のところ最後まで修行を完遂できたのは甘露寺さんくらいです。なのに炭治郎さんは一言も弱音を吐かずに凄い勢いで鍛錬を積みまれています。とても凄い事ですよ」

「それは杏寿郎さんの教えが良いからだよ。俺は何も凄くなんかないさ」

確かに、杏寿郎による扱きは前世で経験した柱稽古に全く劣らないほど苛烈だった。

ひたすら打ち込み稽古を続けるだけなのだが、その相手となる杏寿郎が全力の熱意で応じてくれるものだから、自然と此方も力んでしまいに全身全霊を以って竹刀を振るうよう誘導されてしまう。

しかも体力の限界を超えても、杏寿郎からの熱い叱咤激励に身体は否応無しに動く。彼の想いに応えたいと奮起してしまうのだ。そして修行後には心が燃え尽きて、動けなくなってしまうんだとか。

「千寿郎君の方こそ毎日煉獄さんと稽古してるじゃないか。とっても凄い事だよ！」

「いえ……私こそもつと頑張らなければならぬ立場なのです。でも分かっているんです、兄は私の心が折れない程度に指導を緩めてくれている」

ほんの少し、千寿郎の声が震える。悲しみと焦り、そして諦めの匂いがした。

「兄は父からの指導を殆ど受ける事なく、歴代炎柱の方々が残した指南書を読み込み、炎の呼吸を極めました。……私は、そんな優れた兄から幾ら訓導を受けても、才能が開花する事はありません」

「非常に情けない限りですが、生まれ持った素質に抗う事はできません。そういう意味も含めて炭治郎さんは凄い方です。本当に」

炭治郎は拳を握り締める。

励ましてあげたい、千寿郎に剣の道を諦めて欲しくない。それが正直な気持ち。

だが彼に才能がない事は炭治郎自身よく分かっていた。既に二年後の彼の姿を知っているから。そんな彼に剣の道を勧めていいのか。これから延々と苦しみ続ける事が分かっているのに、そんな残酷な未来を歩ませていいのか。

何か千寿郎の為にしてあげられないか。杏寿郎を死なせないのは既に決定事項である。それに加えて、何か千寿郎を喜ばせる方法は無いものか。

「……正しいと思う道を進んで欲しい。己を決めるのは千寿郎君のお父さんでも、杏寿郎さんでもない。千寿郎君自身だから」

結局、前回と同じ文言しか言えなかった。

それでも千寿郎は曖昧に微笑み、ただただ炭治郎に頭を下げるのみだった。

休憩時間が終わり、稽古場に杏寿郎が戻ってくる。鎧鴉からの伝達を父である楢寿郎に伝えに行っていた間の休憩だった。

冷たく遇らわれた筈だ。炭治郎が此処にやって来た時だって大いに揉めたものだ。未だ面と向かって顔を合わせて居ないが、炭治郎の居ない所で杏寿郎や千寿郎に暴言を喚き散らしたのは容易に想像が付く。

内心では父の墮落した様に深い失望を覚えているだろう。だが、杏寿郎はそんな様子をおくびにも出さず、いつもの澆刺とした様子で炭治郎と千寿郎に訓練の再開を告げた。

竹刀を振るいなんとか杏寿郎に喰らいつく。

今は敢えて水の呼吸を使わず（杏寿郎の希望もあって）ヒノカミ神楽での行動を心掛けていた。それもいつもの軽やかに宙を舞うような流麗な剣戟ではなく、炎の呼吸のように足を止めて強烈な一撃を繰り出すことを意識して。

今の炭治郎の身体といえど、その力は巨石を切り裂く程度には優に到達していた。しかし、杏寿郎はそれをあっさり跳ね返していく。

踏み込みが他の流派に比べてしっかりとっている為、相手の攻撃を受けるといふ点で優れている。少なくとも、今の炭治郎では突破する見込みが無いほどに。

「うむー。いい動きだ！ 次はもう少し腰を捻って、尚且つ体幹が崩れないよう意識しながら攻撃してみるといい！ 更に鋭くなる！」

「攻撃を、更に鋭く！」

「そうだ！ そして技を高める近道は心を燃やす事だ！ 竈門少年の心意気は素晴らしい！ その調子で更なる高みを意識するんだ！」

育手として優れた手腕を持つ杏寿郎だが、彼をして炭治郎の発する非凡な才能には強く心を惹かれた。技の飲み込み具合が非常に良い、なにより炎の呼吸を扱う上で最も重視すべき点を炭治郎は既に身に付けている。

非常に感心する他なかった。

「そういえば！ 千寿郎になにやら励ましの言葉を掛けてくれたそうじゃないか！ 何を言ってくれたのかは知らんが礼を言わせてくれ！」

「い、いえそんな。俺は月並みな事しか……！」

「謙遜するな！ 千寿郎の顔がいつもより晴れやかだったし、それに稽古にも熱が入っている！ 君のおかげと言わずして何と言う！ ありがとう！」

満面の笑みで礼を言いつつ、怒涛の打ち込み。流石の炭治郎もこれには反応するので精一杯で、攻撃に転ずる事ができなかった。

軟弱な身体で少しでも拮抗できているのは、長きに渡る死闘によって培われたセンスと、杏寿郎直伝の踏み込みによる受けのおかげだっ

た。それらが無ければ炭治郎の身体は易々と稽古場の壁に叩きつけられていた事だろう。

「思えば千寿郎には苦勞をかけている！ 俺がもつと上手く教える事ができれば、あんな苦しみを抱く必要もなかっただろう！ 自分が腹立たしい！ 情け無しッ!!」

「むん！ むんっ！ それは、違うと思います煉獄さん！ 千寿郎君は絶望していない。自分の事を腹立たしく思ってるようではありま
すけど、それでも！ 太陽の如き導しるべに彼は、救われてると思います！
きつとそうだ！」

迫り来る竹刀を必死に押し返しつつ、炭治郎は叫ぶ。何故なら他ならぬ自分がそうだったからだ。死してなお煉獄杏寿郎の言葉は根強く炭治郎を突き動かす原動力となってくれた。

それに匂いがそうだった。千寿郎の不満は自分が不甲斐ない故のもの。杏寿郎に対しての悪感情などひとつもない。救われている筈なのだから。

「そうか！ そう言ってくれるか！ ありがとう竈門少年！」

所詮、杏寿郎が千寿郎にしてあげられるのは、断片的な父との記憶を再現する真似事に近い物だけ。それが果たして救いになっているのか、甚だ疑問だった。

杏寿郎は先代から教えを殆ど受けていない、ほぼ我流で習得した炎の呼吸である。記憶朧げなかつての父との思い出を何度も脳裏に浮かべながら、必死に努力した。

そんな杏寿郎の姿を見てきた千寿郎。劣等感が芽生えないはずない。

だから敢えて否定し続けた。自分と弟は違うのだと。

剣の道を極めるならそれで良し。もし諦めても、千寿郎の気立ての良さなら将来は絶対に立派な人間になれる。

自分には母が居た。

千寿郎には兄が居る。

母のような立派な人に遠く及ばなくとも、それでも弟の道導になれるのなら。

ふと、業火のように燃え盛っていた鬨気がみるみる減衰し、杏寿郎の動きが止まる。あまりにも突然の事で炭治郎は勢い余って前のめに転倒した。

（うぐつ!? イデデ……どうしたんだろう、煉獄さん）

「君と稽古して、そのヒノカミ神楽を見てみると、何故だか不思議な気分になりそうになる。強烈な才能を目の当たりにして、少し拗ねてしまいうような、そんな気持ちだ」

そんな言葉とは裏腹に、晴れやかな笑顔のまま杏寿郎は深く頷いた。

「竈門少年。本来キミを指導する役目は俺の父である煉獄禎寿郎に依頼されたものだった。俺は代役だ。……今やかつての面影はなく、父は酒に入り浸る毎日。昔はああじゃなかった、とても熱い人だった」炭治郎は兎も角として、杏寿郎は父の心が冷めてしまった正確な原因を知らない。母の死が父を狂わせてしまったのか、それとも歴代炎柱の手記に何か気に障る事が書かれていたのか。その両方かもしれない。

結局、禎寿郎の心が強くなかったに尽きるのだ。

「父の気持ち少し分かったような気がするよ。代々煉獄家が継いできた誇り高き炎柱としての責務もそうだし、眩いばかりの才能を持った後進や偉大な先人達を前にして焦りに駆られてしまう事も恐らくあっただろう！ 自分の成した全てが無意味に思えた事もあっただろう！ 確かにこれは堪えるかもしれないな！」

故に、どうしようもなく血潮が滾る。

自分と父は違う。

「だが俺は決して挫けない！ そんなことで心の情熱は無くならない！ 心の炎が消えることはない！ 寧ろこの感情が愛おしく思える！」

父を残念に思う気持ちこそあれど、強く責める気は毛頭ない。心も身体も、人の強さは人によってまちまちであり、自分は偶々両方とも強い方だった、というだけの話。

ならば父の分まで自分が励めばいい。弟が剣以外の道を選べるよ

う自分が更に刃を振るえばいい。たったそれだけの事である。

「我々鬼殺隊には途方に暮れる時間など許されない！ 前進あるのみだ！ 純然たる天賦の才に少しでも近付けるよう、より一層鍛錬を積みまねばならん！ 共に技を高め合おう！ 竈門少年！」

「――」

どうしてだろうか。

そんな杏寿郎が、炭治郎にはどうしようもないほどに強く、眩しく、そして危うく見えた。

「死なないでくださいね。煉獄さん」

するりと溢れ出た言葉は、杏寿郎に対する同意でも、自分の才能に対する否定でもなく、彼の身を案じる言葉だった。

杏寿郎の信念の結末を知っていることも一因だろうが、それよりもただ単純に、死んでしまいそうだったから。彼の死の形がハッキリと見えてしまった気がしたから。

「急にどうした！ 俺に死相でも見えたか？」

「あ、いえ！ なんとなく……そんな感じがしただけで」

「そうか！ それは不味いな！ ではキミの予感通りにならないよう更に強くならねば！」

杏寿郎は快活に笑い飛ばすと再び竹刀を構える。稽古再開の合図だった。それに倣い、炭治郎もまた腕に溜まる疲労を無視して刀を振り上げる。

結局、自分の当てにならない予感を払拭する一番の近道は、他ならぬ自分が強くなる事なのだから。

その後、千寿郎が夕餉の支度を終えた事の報告を以って今日の稽古の終了を告げられる。

互いに正座の姿勢で向き合い、深く頭を下げる。

「今日も一日、ご指導ありがとうございました！」

「うむ！ こちらこそ感謝だ！ 君のヒノカミ神楽とやらのおかげで俺自身気付かされる事が多い！ やはり呼吸というものは奥深いも

のだな！ 日々精進しなければ！」

二言目には努力、精進、更なる高み。やはり杏寿郎は只管に前向きだ。

そんな彼を見てみると自分もまた明日への活力が湧いてくるような、そんな気がした。

「炎の呼吸の完全習得にはまだ程遠いがコツは掴んでいる！ ただあまり極めすぎても竈門少年が一番使い慣れているだろう水の呼吸に支障が出るだろう！ その程度が良い塩梅なのかもしれない！」

「まずは”常中”を安定させる事を優先するのがいいと思う！」

「そうですね。炎の呼吸の一端に触れてから目に見えてヒノカミ神楽の威力が上がってきましたし、あとは煉獄さんの教え通りに身体に慣らしていければ問題ないと思います！ 一月後の最終選別までにはなんとか物に出来れば！」

「ふむ、そうか。一月後か！ ……早いな！」

杏寿郎にしては珍しく、少しばかり逡巡した様子で腕を組み、思案を巡らせていた。しかし即断即決の男にはその時間すらも煩わしかったようで、勢いよく頷くと炭治郎へと問いかける。

心を見透かすような力強い視線に炭治郎も思わずたじろいだ。

「キミは何故そんなにも急いで進もうとする？ それが悪い事であるとは断言しない。しかし急がば回れという言葉もある。進み続けなければならぬのは当然だが、身に余る速さではいずれ足元が揺らぐ事も考えられる。自壊など以つての他だ！」

決して炭治郎を責めているわけではない。だが現状を手放しに推奨しているわけでもない、といったところか。

杏寿郎の言う事が正しいだろう。自覚はある。

でも、まだ足りない。

「今この瞬間も、罪の無い人たちが鬼に喰われている」

「その通りだ！」

「俺はそれがとても辛いんです。力があれば救えた人たちがむぎむぎと殺されるのを黙って見ていただけなんて、絶対に嫌だ」

怒りに身を震わせる。

鬼舞辻無惨と、自分に対しての激しい怒り。

「もつと早く強くならなければならぬんです。俺より凄惨な人たちは今もずっと先で戦っている、俺は一秒でも早くそこに辿り着きたい。煉獄さんたちと一緒に戦いたい！」

「いい心掛けだ！ ならば俺は止めはしない！ 燃え上がる心を抑圧するなど炎柱としてあるまじき行為だからな！ 生き急ぐ竈門少年を応援する事しかできないが！ 是非とも頑張るといい！」

そう言い切ると杏寿郎は笑いながら、その場を後にした。何か探りをいれられるのでは無いかと心配していた炭治郎だったが、特にそういった話題に発展しなかった事にほっと胸を撫で下ろす。

嘘嫌いの炭治郎である。嘘はなるべく吐きたく無い。

「そうだ言い忘れていた！」

ひよっこり戻ってくる杏寿郎。慌てて居住まいを正す。

「明日から柱の任務で忙しくなる！ 中々稽古を付けてやれなくなるが、千寿郎と共に頑張ってほしい！ 炎の呼吸の指南書は好きに読んでくれて構わん！」

「あ、分かりました！」

「うむ！ それと、父との対面はなるべく避けて欲しい。要らぬ諍いに竈門少年を巻き込みたくは無。父には良く言っているが万が一がある。すまないがよろしく頼む！」

今度こそ杏寿郎が稽古場から出て行くのを見送る中、炭治郎は申し訳なさに口を縛りつつ、床へと視線を落とした。

板張りの床はよく磨かれていて、鏡のように炭治郎の顔を映し出している。ハの字に眉を寄せた情けない表情だった。若干濃くなってきた痣だけが不相応に勇ましく張り付いている。

（そうだ煉獄さんは柱の身、毎日の激務の合間を縫って俺の為に……。槇寿郎さんの件でも酷く心労を掛けている筈だ。申し訳ない……！）

（やはり一癖も二癖もある少年だな。抱えている想いも並ならぬ物だ）

数多くの剣士を見定めてきた杏寿郎だが、炭治郎のような性質を持った人間は初めてだった。とても素直で頗る努力家、一つの目標に向けて突き進む強い意志を持っている。人間的にも非常に優れている。

だがあまりにも歪いびつだった。

剣を握った事がないのだろう素人の身体、長い年月と弛まぬ努力によって磨き上げられた熟練の剣技、純朴な心、複雑な思惑。

どんな生活を送ればあのような人間が出来上がるのか、見当すらつかない。アレが正しく天賦の才というものなのか。

それに炭治郎と初めて出会った時から今に至るまで、頭の片隅に何かが引っかかったような、そんな違和感を幾度と無く感じ取っていた。言葉に出すまでもない小さな違和感だが、それでも——まるで一度自分が指導を施したような、そんな錯覚を抱いていた。

奇妙な少年だ。

ひたむきな彼をどうしても助けたくなくなってしまふ、そんな思いにさせる不思議な魅力を持った将来有望な鬼殺の剣士候補。

『死なないでくださいね。煉獄さん』

ほう、と軽く息を吐く。

返事をするわけにはいかなかった。到底約束できるようなものは無いからだ。

悪鬼から民衆を守る為なら命を顧みないのが鬼殺隊員であり、況してや自分は柱である。死ぬ覚悟など、とうの昔にできている。

自分が命を投げ捨てなければならぬ場面が来るのなら、喜んで運命に従おう。他の柱だってそうだ。歴代の殉職した炎柱だってそうだった筈なのだ。

自分ではない誰かの為に死んでいけるような精神を持った素晴らしい人間たちのお陰で、今もこうして鬼殺隊は存続しているのだから。

決して死にたいわけじゃ無い。父より早く死ぬような親不孝者になりたく無いし、なにより千寿郎を残して逝くわけにはいくまい。

だがそれでも、自分の命と引き換えに誰かの尊い命を守れるのなら、喜んで差し出そう。

(すまないな。竈門少年)

それが自分の生まれ持った責務。

進むべき道なのだ。

最終選別

柱の任務で杏寿郎の不在が多くなっても炭治郎は只管に竹刀を振るう。

またある時は千寿郎の家事手伝いをして、またある時は槇寿郎とはなるべく顔を合わせないよう細心の注意を払う、そんな日々を過ごしていた。

煉獄家での稽古は雪解け後も続き、小さな春を感じる頃には修行の大方が完了し、最終選別を目前に控えるまでの月日が流れた。

進展は修行だけではない。

精度を落とさず一心に鍛錬を続ける熱意や、嫌がる素振りを全く見せず家事等を積極的に手伝ってくれる炭治郎の姿勢に、千寿郎は完全に心を許していた。さらには炭治郎の過去未来を問わない様々な体験談に心を驚掴みにされており、そのおかげか千寿郎はよく笑うようになった。

また時々甘露寺が顔を見せに来てくれることもあつて煉獄家は常に和気藹々とした雰囲気のまま椿の開花を迎えるに至る。

見送りの日には互いの別れを大いに悲しみ、千寿郎とは次なる再会を約束する事となった。任務明けの杏寿郎も見送りの場に颯爽と駆けつけ、彼なりの激励と言わんばかりに炭治郎の背中をバシバシ叩く。

「またいつでもいらしてくださいね炭治郎さん。鬼殺隊に入隊した時にでも是非！ その時は、今度は客人として精一杯歓待しますから」「そうだな！ 竈門少年に限って方が一は無いだろうが、油断はするな！ キミなら絶対やれる筈だ！ 無事に通過できたら支給される鎧で教えてくれ！」

「ええ勿論です！ 本当にありがとうございます！ 煉獄さん。それに千寿郎君」

大きく頭を下げる。胸いっぱい感謝を込める。

稽古をつけてもらった事もそうだが、心理的な面でも煉獄兄弟との

生活は炭治郎にとって大きな支えになっていた。

いくら炭治郎が精神的に成熟しているとはいえ、状況が状況。家族との二度目の別離を体験した事もあって心が全く疲弊していないかと言え、そんな筈が無い。

二人の存在はそんな炭治郎に確かな熱意と安らぎを与えてくれている。此処が修行環境として非常に優れていた事は言うまでもないが、それ以外にも齎された効果は限りなく大きい。

この世界でもまた恩を受けてしまった。

返す方法は一つしかないだろう。

「俺、鬼殺隊に絶対入隊します。そして煉獄さんと一緒に戦ってみせます！」

「ああ待ってる！ 共に鬼殺隊を支える柱となろう！ ——心を燃やせ！ 竈門少年！」

互いに強く頷き合う。

そして炭治郎は晴れやかな表情で、二人の姿が見えなくなるまで手を振り続けながら、煉獄家を後にする。

目指すは狭霧山。予定通り、鱗滝への報告と禰豆子の安静確認の為だ。

ふと無意識に額の痣を指でなぞってみる。己の命の蠟燭が今にも燃え尽きようとしている様を強く想像させる。そうすると嫌でも力が湧いてくるのだ。

休んでいる暇はない。自分に残された時間をギリギリまで精一杯使い切らねばならない。今この瞬間も貴重な修行の機会である。

杏寿郎からの言葉を胸に、炭治郎は”常中”を意識しながら力強く地面を蹴り上げた。

「……短期間でその領域に至ったか。儂の見立て以上だ。よくやった炭治郎」

鱗滝からの出迎えを受けた後すぐに居間へと通された。すぐに座して師匠と対面する。未だに眠る禰豆子の頭を撫でながら、炭治郎は

目を伏せて首を横に振った。

「いえ”常中”はまだ肺に違和感を覚えます。それに煉獄さんとの組手は終始押されっぱなしでした。俺なんかまだまだです」

「何を言うか、相手は現役の柱だ。老いた儂では太刀打ちが出来んほどの実力者。それを相手にして『打ち合い』になったのなら大したものだ。”常中”も基本の技術とはいえ嘆かわしい事にそれが出来ん隊士は鬼殺隊にごまんという。刀を握って数ヶ月で到達できるようなものではない。存分に誇れ」

鱗滝らしからぬ褒め言葉の連続。厳しい評価を覚悟の上で構えていたものだからその落差に少し身体の力が抜けてしまう。勿論理由がある。

「炭治郎。お前は儂が見てきた弟子の中でも類稀なる素質を持つておる。このまま鍛錬を積んでいけば柱も夢ではあるまい。最終選別も突破できるだろう。……だが、それでもお前を失うのが恐ろしい」

脳裏を過るのはかつての弟子達。特に錆兎。

あの傑物でさえも最終選別を突破できなかった。

「素晴らしい才能を持った原石を育てても、その輝きを世に出す前にみんな死んでしまう。信じて送り出した弟子達の悉くを死なせてしまった。自分は呪われているのではないかと何度思った事か」

「そんな……!」

「お前を炎柱に預けたのもそういう思いがあつたからだ。迷信めいた考えだが、儂の弟子でなければ生き残れるのではないか——」

「鱗滝さんッ!」

それ以上は言わせなかった。大きく声を張り上げて鱗滝の言葉を無理やり遮る。

違う、違う。それは間違っている。

「俺は鱗滝一門の竈門炭治郎です。誰が何と言おうとこの肩書きが俺から外れる事はありません! 俺は絶対に死なない。禰豆子を残して、鬼舞辻を生かしたまま死ぬ気は毛頭ないですから」

ふと、鱗滝の傍に視線を落とす。

自分の意志をより強く伝えるにはやはりコレが一番なのだろう、

と。そんな事を考えながら徐おもむくに手を伸ばした。

「その狐のお面。貰ってもいいですか」

厄除の面。悪いことからこの身を守ってくれるもの。そして兄弟子達が生き残れなかった理由の一つである。

面を胸元に寄せる。

「生き残ります。必ず」

「炭治郎、お前はやはり凄い子だ。……無事に帰って来い。此処で待っておるぞ。禰豆子と共に」

期待と願いを込めるように。鱗滝は炭治郎の手を強く握りしめた。

日が昇ってすぐに炭治郎は予備の日輪刀を受け取り、試練の場となる藤襲山へと発った。途中、大岩の前で錆兎や真菰達への報告と祈りも欠かさない。

距離はそれほどなく、数刻走れば目的地の標が見えてくる。辺り一面に狂い咲く藤の花の密集地帯、その下に人の姿が見えた。本来の藤の開花の季節とひと月ほどズレているが、前回と変わらぬ規模の花々だ。

（やっぱり此処らの藤は一年中咲いているんだなあ。それになんとか懐かしさも感じる）

そんな事を呑気に考えつつ、先に到着していた隊士候補達の中にも割り入っていく。心なしか周りから侮蔑や憐みの視線を向けられているように感じた。匂いもそれに近い。

それもその筈で、齢にして弱冠13歳の子供である。周りの少年青年よりも更に幾らか若い。冷やかしとでも思われているのだろうか。

だが炭治郎は気にしない。元々そんな悪感情に敏感に反応するよくな性格でもなく、それよりも他のことに興味があった。

誰か自分の知っている人は居ないかとキョロキョロと参加者の顔を窺う。

（当たり前前だけど善逸や玄弥は居ないよな……。けどおかしいな。カ

ナヲも参加はまだの筈なのに、微かに彼女と似た匂いがする。というより、会った事がある匂いだ)

参加者はそう多くないので人混みの間を通り抜けて匂いの元を辿れば、自ずとその人物に辿り着く。そして炭治郎はそういう事か、と一人納得していた。

彼女は集団の端に居た。此方に背を向けており、しきりに胸に手を当てて大きく息を吸っている。酷く緊張しているのが匂うまでもなく見て取れた。

顔馴染みだ。此方の世界ではまだ顔を合わせた事がないが、前はとも世話になった。無惨を倒した後も付き合いは続き、自分が床に伏せてからはよく見舞いに来てくれたのを覚えている。伊之助や自分を叱り付ける彼女の声は今にも聞こえてきそうだ。

カナヲの匂いがするのは当然だろう。何せ彼女とアオイは親友同士だ。

(そうかアオイはこの年に最終選別を受けてたんだな。歳は確かカナヲより一つ上……俺から見たら二つ上。ちようど時期が重なったんだな)

ただただ単純に知り合いに会えたのが嬉しかった。それがアオイとなれば尚更だ。

ひとまずアオイに話しかけよう。緊張しているようだし、軽く声掛けだけでも。

そう思っただけで彼女の下に近付こうとしたのだが、前方からやってきた男に行手を遮られてしまう。身を屈めて通ろうとするが、わざと道幅を大きく取るように立っている為にそれも叶わない。それどころか炭治郎に無理やり肩をぶつけてくる始末だった。

なお杏寿郎との稽古の賜物で体幹が大幅に強化されていた為、身体が揺らぐ事はなかった。困惑しつつも取り敢えず頭を下げる。

「なんだテメエは？ どけよ餓鬼が」

それに対してこの物言いである。これには流石の炭治郎も眉を顰めた。

「ちよつと！ キミからぶつかって来てそういうの良くないと思う！

共に鬼殺隊を志す仲間なのに」

「ハッ、笑わせんな。俺はテメエみたいな世の中を知らない愚図が一丁前に表を闊歩してるのが我慢ならねえんだよ。幼稚な狐の面なんか付けやがって……鬼狩りは子供のお遊戯じゃねえんだ」

「む……！ この面は師範が俺の無事を祈って預けてくれた物だ。侮辱するな！」

「願掛けで鬼を倒せるなら世話ないな。何処の馬の骨に師事を受けたのかは知らんが、こんなすぐにも野垂れ死ぬようなカスを輩出するようじゃ、碌な師範じゃないんだろ。哀れなもんだ」

「なんだとお前」

底冷えするような侮蔑の視線、むせ返る程の悪意の匂い。鬼殺隊に所属する人間に対してそんな心証を覚えたのは初めての事だった。

鬼殺隊として一枚岩ではない。自らの私利私欲を貪るだけの者も少なからず存在したのかもしれない。目の前の男を見ていると不意にそんな考えが浮かぶ。

自分はいくら馬鹿にされてもいい。だってそんなに出来た人間ではないから。

でも尊敬する人、大切な人を侮辱されて黙っていられるほど落ちぶれてはいない。

気付けば炭治郎は拳を握りながら怒気をぶつけていた。男もそれに応戦するように腰の刀を引き抜き、炭治郎へと稲光のように燦く黄の刃先を向ける。

二人の剣呑な雰囲気を感じたのか、周囲の参加者達が野次馬となって此方を見ている。そんな状況に嘸し立てられた男も徐々に熱が高まっており、一触即発の危機だった。

「ちよつと、何やってるんですか！ 鬼殺の剣士になろうという者が人に刃を向けるなんて！ やりすぎです！」

「……本気になんなよ。ちよつとした戯れだ。お子様の遊びに付き合ってたっただけさ」

騒動の前から一団とは距離を取っていたアオイだが、流石に見かねた様子で仲裁に入る。一方の男は言葉の通り本気で斬るつもりはな

かったようで、鼻を軽く鳴らして納刀。一先ず刀傷沙汰は避けられた形だ。

「俺は将来柱になる。その時に下の連中がお前みたいな餓鬼ばかりだと張り合いがないからな。万が一奇跡で入隊できたとしても身の程を——」

「黄色……お前、雷の呼吸を使うのか」

自分に向けられていた刀身は、親友善逸が使っていた物によく似ていた。強いて言えば男の方が若干暗い色なくらいか。「だったらなんだ」とぶつきらばうな返答を貰い、炭治郎の頭もいくらか冷えた。

心なしか善逸の匂いまでする。その懐かしさに炭治郎は目を細めた。

「俺の知ってる剣士にも居るんだ、雷の呼吸。お前みたいに気は強くないけど、とつても頼りになる良い奴だ。刀を見て思い出した」

「そうかい。俺もお前を見てたら思い出したよ。馬鹿みたいに喚く事しかできないカスみたいな愚図をな。お前やアイツのような奴は早死にするぜ」

「ひとつと多いです！ もう案内役の方は来てますよ。それでは！」

嫌な顔をしながら去っていく間際のアオイの言葉でようやく気付いた。此方に注目していた野次馬達はいつの間にか視線を外し、産屋敷家からの使者に意識を向けていた。

居たのは産屋敷あまね。此方を見ている。自分たちの一悶着が終わるまで待っていたようだ。恥ずかしくなった炭治郎は慌ててペコりと頭を下げて、一方で男は知らぬ存ぜぬといった様子であった。

「皆さま、今宵は最終選別にお集まりくださってありがとうございます」

前置きはその程度に、合格条件が淡々と語られる。内容は前回と全く同じだ。

藤襲山の中で七日間生き延びる。遭遇した鬼を悉く討伐してもよし、逃げに徹するもよし。兎に角生き残ることのみが求められる試験だ。

過酷な一週間となるだろう。無惨との最終決戦を生き延びた炭治

郎ですら、最終選別の時を思い返すのは少し憚られるくらいには辛かったのだから。

今回もまた無事に生き残れるだろうか。

——違うだろ、炭治郎。

(え? ……誰だ?)

ぐるりと周り見渡すが、何者かが炭治郎に声をかけた様子はない。もしやただの空耳だったのか。それにしてもハッキリしていた。妙に頭に引つ掛かる声音だった。

やがて産屋敷あまねより開始の合図が為され、参加者全員が藤の外へと出た後も炭治郎はその違和感に頭を捻り続けていた。

選別はもう始まっているのだ。集中しなきゃいけないのに。

(違う? 何が違うんだ。俺は七日間生き延びて鬼殺隊にまた入隊する。鱗滝さんや煉獄さんと約束したんだ。それ以外に正しいことなんて果たしてあるのか)

そんな自問自答を繰り返しつつも、実の所答えは分かりきっていた。疑問や困惑というより、自分の心に整理を付ける為のものだった。

正解に辿り着いた途端、思考の靄が取り払われ進むべき道がハッキリとした。精神が研ぎ澄まされていくのを感じる。

(分かったよ錆兎。この視点こそ、キミの見た世界なんだろうな。富岡さんから話を聞いた時は、感嘆こそすれど凄すぎてあまり実感が湧かなかったけど、今の俺ならきつと理解できている)

前回は自分が余りにも未熟で気付かなかった、木々のざわめきに混じって微かに聞こえる恐怖の息遣い、それに悲鳴。今の自分なら分かる。

鬼との戦いに敗れた者、傷付き倒れる者。藤襲山にある様々な音や匂いが次々に炭治郎へと齎されていくのだ。

方法こそ違えど、錆兎もきつと今の炭治郎と似たような状態だったのだろう。そして彼は実際に心の導くままに身体を動かし、見事目的を達成して、拳句に力尽きた。

(この想いは、確かに止めようがない)

死への恐怖を前にして震える者達を救わずにはいられない。見殺しになんてできない。

杏寿郎だつて言つてたじやないか。「特別な力を持つてこの世に生を受けたのなら、弱き人を助ける事が至上命題の責務である」と。

その通りだ。何も間違つちやいない。

刹那、側面の茂みから鬼が飛び出し、鋭利な爪を炭治郎の首へと差し向ける。身を潜め、此処を通る人間を待ち伏せていたのだろう。

「数年ぶりの肉だア！ 頂きいやッあゝ!?!」

「問題ない。今の俺ならできる、やってみせる」

それを炭治郎は居合一閃の下に斬り捨てた。首を日輪刀で切断され、鬼の身体は塵芥となつて空気に溶けていく。

グズグズしている暇はない。時は一刻を争う。

この最終選別を通過するのは当然でなければならぬのだ。炭治郎が己に課した試練の難度は前回の比ではなく、今回の選抜もその一環である。自分が振るうのは救いの刃なのだから。

——進め、止まるな炭治郎。

(勿論だ。ありがとう錆兎)

偉大な兄弟子への敬意を胸に、炭治郎は闇夜に潜む鬼の群れへと身を投じた。

救いの刃

志なら誰にも負けないと信じていた。

尊敬する二人の柱から教えを受け、優秀な妹分とともに切磋琢磨してきた。実力は及ばなくとも、鬼狩りに生を捧げる覚悟はしていたつもりだ。

脳裏に自分を心配そうに送り出してくれたみんなの顔がよぎる。花柱 胡蝶カナエの死から幾許かの時も経っておらず、それに引き摺られてアオイの事を不安に思う気持ちは彼女自身よく心得ていた。かくいうアオイもカナエの死を原動力として奮起してきた。しのぶやカナヲの強烈な才能の前に挫けそうになった事もあったが、それでもアオイは諦めなかった。

決意と覚悟さえあれば、いつかこの努力も報われる日が来るだろうと。そう信じて手の豆が潰れても剣を振り続けた。

間違いだと気付いた。自分はそのような大層な人間ではない。信じていた決意が脆く崩れていく。脆弱な覚悟が震えとなって顔を覗かせている。

私は、駄目だ。

「ガハハ！ 女の肉食うなんて何十年振りだろうなア！ 有り難エよわざわざ食われに来てくれてよお。本当にありがとうなあ？」

「――！」

何の変哲も無い一般的な鬼。血鬼術を使う様子はないし、身体的に特段秀でている所があるわけでもない。鬼殺の剣士なら倒さなきやいけない相手。

それを前にして、アオイの心は震え上がっていた。手足の動きも覚束ないので剣先を相手に向けることすら能わなかった。

しのぶが言っていたじゃないか。本物の殺し合いを訓練で再現することは不可能、空気そのものが違うと。決して吞まれてはならないと。

その通りだ。人間の姿をした異形の者が自分を捕食する為に純粋な殺意をぶつけてくる、それだけでも逃げ出したくなる理由は十分で

ある。

そして自分の弱さにこの一瞬で嫌というほど打ちのめされ、アオイの戦意はみるみる萎んでいく。戦う前に勝負は決していた。

アオイは刀を鬼へ投げつけると、背を向け逃げ出した。戦いを放棄した。

先ほどまで恐怖で動かなかった身体が、いざ逃走となると、いの一
番に動き出したのがどうしようもなく情け無くて、自分が嫌になる。

「ガハハ！ おい待てやア、みすみす逃すわけ——」

—— 水の呼吸壱ノ型 水面斬り

ふつ、と。背後から響いた斬撃音。泡が弾けたのかと聞き紛う程に流麗な響きで、アオイと今まさに崩れ落ちる鬼は状況を理解するのに数瞬の時を要した。

空に溶ける鬼の傍には見覚えのある少年の姿があった。つい先ほど、柄の悪い男に絡まれていた、自分よりも幾らか若い男の子。正直、冷やかし気分で最終選別に参加したのではないかと疑ってすらいいたあの少年。

それが如何だろうか。一刀の下に鬼を斬り伏せた。

しかも佇まいは早朝の湖畔の如く静まりかえっており、歴戦の剣士を思わせる風格だった。

「大丈夫ですか？ 怪我は無いですか？」

呆けたままのアオイに対して、少年——竈門炭治郎の言葉は余りにも普通で、この場においては余りにも優し過ぎた。頷くので精一杯だった。

炭治郎も笑顔で頷き返すと、鬼の亡骸が有った場所に落ちている日輪刀を拾う。そしてアオイへと手渡した。

「この刀はきつとキミにとって大切な物だと思う。失くさなくて良かった。……どうか気に病まないで欲しい。その選択は必ずしも間違いないのだから。でも心に熱がまだ残っているのなら、もう捨てちゃダメだ」

優しさに溢れた瞳。心を奮い立たせてくれる頼もしい言葉。炭治郎は再度アオイに言い聞かせるように頷くと、次なる鬼の下へと駆け出してしまった。

ありがとう。絞り出せたのはその一言だけ。

受け取った日輪刀。自分がぞんざいに投げ出したそれは、アオイの無事を祈ってしのぶが授けてくれた物だった。蝶屋敷のみんなの顔が懐かしく思える。

刀を大事そうに胸元に抱き寄せると、涙ながらに呟いた。「ありがとう」そして「ごめんね」と。

◆◆*

何体の鬼を斬り伏せたか、それすらも曖昧になってきた。流石に疲労と心労が積み重なってくる頃だ。

……いやまだだ。炭治郎の心は燃え尽きない。

恐怖と鮮血の匂いを辿って藤襲山を駆けずり回っているのだが、どうしても少しだけ間に合わない事例もある。アオイもその例の一人だ。

命を救えても、心に深い傷を残してしまう。再起が難しそうな傷を負ってしまったっている者だっていた。そんな彼等を見ていると、どうしても心苦しくなってしまうのだ。

(頑張れ炭治郎……！一刻も早く鬼を倒すんだ！お前ならできると、ああそうさ、この時のための修行だった筈だろ……！)

と、すぐ前方からまた血の匂いがした。一人の男が憔悴した様子で日輪刀を構えており、対して鬼は2体。じりじりと距離を詰めている。右の袖から血が滲んでいる。

「チツ、まずったな……こんな雑魚鬼共に遅れを取るなんてよ……！こんな所で躓いてる暇はねえってのに」

未だ闘志は折れていないようだったが、危機的状况に変わりはない。

大丈夫だ、今助ける。

—— 水の呼吸肆ノ型 打ち潮

滑らかな水流の如き斬撃は、淀みなく鬼達の間を流れ抜けた。ほぼ同時に二つの首が飛び、炭治郎は着地と同時に膝を落とした。数瞬でも体力回復に務めるのだ。

「大、丈夫ですか……！」

「どきやがれ！ まだ終わってねエぞ！」

男の視線は炭治郎の真上を向いていた。そう、鬼は2体では無い。3体いたのだ。

好機と見たのだろう。足場としていた太枝を蹴り、猛スピードで炭治郎に向けて爪を振り下ろした。

お見通しだ。最初から匂いで場所は分かっていた。

構えていた刃を上へと返し、水の呼吸を別のものに切り替える。対空に逃え向きかつ、咄嗟に放てる型となれば、最近習得したアレがいい。

—— 炎の呼吸貳ノ型 昇り炎天

斬り上げ一閃。鬼の腕ごと首を斬り飛ばした。

当然、水の呼吸から炎の呼吸に無理やり切り替えた反動はある。しかしヒノカミ神楽の時と比べれば軽微だ。問題ない範疇。

「へえ、やるなお前！」

バシンツと背を強く叩かれる。呼吸を整えている最中だったので少しむせた。

「いくら俺が注意を引いていたとはいえ、その年で3体の鬼を倒すのは並大抵の事じゃあない。このまま生き残る事ができればきつと出世できるぜ」

「ど、どうも？ ありがとうございます」

「まっ、出世しても俺の方が人生経験においては先輩だからな。目上はちゃんと敬ってくれよ？ 同期でも俺の方が先輩だ」

調子のいい様子でそんな事を言う男に若干困惑しつつも、まあ元気ならそれでいいかと思う。

「しかしこの試験、思った以上に厳しい。連携とまではいかないが鬼共が同時に襲ってくるし、異形の鬼までいやがる。これ以上危ない橋を渡るのは御免だからな、あとは弱い鬼でも探しつつ適当に逃げてるさ。お前もそうしな」

「異形の鬼、ですか。そいつは何処に？」

「気になるか。そりやお前も出会したくないよな。此処からもう更に行った所にいやがるから、さっさと麓に向けて——ん？」

話の概要を大体把握すると同時に、再度駆け出した。藤襲山の頂点に君臨する異形の鬼といえ、アイツしかいない。最終選別が始まってからずっと探していたのだ。

兄弟子達の敵討ちでもあるし、なによりアイツをそのまま生かしておけばこれからも隊士候補の若人達が志を為さぬまま喰われる事になる。

「お、おい!？」

「麓の方に負傷した人達が集まっています！　また後で会いましょう！」

「正気じゃねえ……ありや出世するよりも先に早死にする典型的な奴だな」

出世と一攫千金を夢見て鬼殺隊を志願したこの男に炭治郎の行動が理解できる筈もなく、むぎむぎと死地に飛び込む阿呆を見送るに留まった。ただし、ほんの少しの期待を抱きながら。

「やっぱり凄い匂いだ……！　鼻が曲がりそうなほどの腐敗臭……！」

間違いなく藤襲山の中でもっとも酷い異臭を放つ鬼だろう。十二鬼月を始めとする強い鬼と対面する時、いの一歩に警戒するのは、その鬼の放つ匂いがどれだけ鬼舞辻無惨のモノに近いかどうかである。

単純にその匂いが鬼舞辻に近ければ近いほど、そして強烈であるほど、強力な鬼である裏付けになる。炭治郎が出会った中で無惨を除い

て一番強かった鬼は、間違いなく上弦の参 猗窩座であろう。彼の放っていた鬨気混じりの強烈な鬼の匂いは、今も鼻の奥にこびりついているように思える。

それらを踏まえ、炭治郎が今対峙しようとしている異形の鬼は如何だろうか。無惨への近しさでは上弦に及ぶ余地は無いが、身体が嫌悪で強張るほどの恐ろしい匂いだった。その存在の歪さが生み出した生理的恐怖によるものなのかもしれない。

炭治郎が負傷した隊士候補達を麓付近に移したからだろう、未だ獲物を手に入れる事が出来ずに山中を彷徨っていたようだ。苛々とした感情が匂いで伝わってくる。

良かった、と。胸を撫で下ろし、改めて異形の存在へと立ちほだかった。

瞬間、手鬼の顔がみるみる喜色に染まる。

「来たか。俺の可愛い『狐』が」

「……」

「毎回楽しみにしてんだ。鱗滝の馬鹿が信じて送り出した弟子達を喰うの。お前で十四だ」

「……そうか」

楽しみにしていた鱗滝の弟子からの素っ気ない回答に、手鬼はつまらなそうに息を吐く。左右二対の腕がやれやれ、とわざとらしい仕草で炭治郎に向けられた。挑発目的のものだろう。

「鱗滝の求心力も落ちたか。こんな淡白な餓鬼を寄越すようになるなんてな。いつぞやかかのすばしっこい女の餓鬼はこの話をした途端、動きがガタガタになったんだがなあ」

「もういい。止める」

手鬼の言葉は間違いである。炭治郎は聞き流していた訳では無い。激しい怒りを内に抑え込んでいただけだ。何も感じない筈がないだろう。

感情の起伏が大きくなり過ぎれば呼吸の乱れに繋がる。常に一定を保つのだ。激情に身を任せ理性を失うような失態を犯すほど、炭治郎は未熟じゃない。

「鱗滝さんから始まったお前との永き因縁は、俺の刃で終わらせる。それだけだ」

「ほざくなッー！」

肉体が膨張し、視界を埋め尽くすほどの腕が炭治郎へと殺到する。手鬼にとつては何という事のない攻撃だが、剣士からすれば堪ったものではない。

広範囲を薙ぎ払い、斬られても即座に行動を開始する再生力を持つ剛腕による猛攻。それを仕掛けるだけで自ずと剣士達は力尽きていくのだ。しかも文字通り手数まで備えている為、猛攻の合間に繰り出される想定外を狙った八方からの不意打ちを防備する事も難しい。また、それらが一撃で致命傷を与えるに足る威力を秘めているのだから、精神面の負担も計り知れない。

この基本的な攻撃を繰り返すだけで数多の若き人材を葬り去ってきた。優秀な鱗滝一門の弟子達を喰らってきたのだ。

——故に、炭治郎の取るべき戦法は決まっていた。

最小限の動作で腕を次々に斬り払い、戦況を無理やり均衡状態へと持ち込む。負けじと更なる量の腕が波状攻撃を仕掛けてくるが、それすらも意に介さぬように悉く斬り落とす。手鬼の再生速度を上回り、ジリジリと少しずつ距離を詰めていく。

その思惑は単純で、手鬼が痺れを切らし大技、若しくは稚拙な絡め手に頼った瞬間それを利用し、一気に距離を詰めて首を叩き斬るのが狙いだ。確実な勝利にはその戦法が一番であると判断した。

消耗を強いる手鬼にとつて、炭治郎の予想外の粘りは不快の極み。しかも手を変え手を変えあらゆる手段を用いて奇襲的な攻撃を仕掛けても、その全てを匂いで見切られてしまうのだから、鬱憤は加速的に増大する。

自分の攻撃が全く通用せず、刻一刻と追い詰められているような感覚は鱗滝との邂逅以来の屈辱だった。

時間にして十数秒後、炭治郎の狙っていた『その瞬間』は訪れた。ただし、炭治郎にとつては最悪に近い、想定外の形となつて。

刀が折れた。

切断し損ねた腕が鼻の先を掠める。

(……ッしまった！ ガタが来てたのか!?)

この短時間で数十匹の鬼の首を斬ったのだ。その分だけ劣化が早まってしまったのだろう。

さらに炭治郎の感覚が麻痺していたのも一因として挙げられる。無意識のうちに自分が本来使っていた黒刀と同じ感覚で、耐久性の大きく劣る借り物の刀を振るってしまっていた。

炭治郎の最大の武器である『経験』が逆に自らの首を絞める結果となつた。

勿論、その隙を手鬼は見逃さない。醜悪な笑みを浮かべながら通常の攻撃に加え、地を這う剛腕を放つ。奇しくも錆鬼の時と同じ勝因、手鬼は勝利を予見した。

そして掴んだ。掴んだ筈だ。その感触は確かに疑いようも無いものだった。

しかし炭治郎の足は陽炎の如く掻き消えた。掌は空を切り、自らの認識と現実の差異に思考が若干固まる。

ヒノカミ神楽『幻日虹』は回避と攪乱を同時に為す型であり、こと受けに限れば全呼吸の中でも最高に近い性能を誇る。手鬼の視覚と触覚は見事に欺かれた。

自分の腕の上に立っている炭治郎。

視線を振り切る速さで此方へと接近する炭治郎。

自らの首に向けて刃を振るう炭治郎。

速い。迎撃が出来ない。

いや、奴の獲物は刀身の半分を失った鈍^{なまく}ら。そんなモノでは並の鬼以上の硬度を誇る自分の首は斬り落とせない。少しの膠着が生じると同時に頭を握り潰してやればいい。

あり得る筈がないのだ。こんな餓鬼に負けるなど……あつてはならない事なのだから。

切断された首。離れる頭。崩壊する体。否応無しに思い知らされた確かな現実。

47年に及ぶ永き因縁は再び絶たれた。13人の兄弟子達の無念だけではない。本来の姿を喪い、怨みと飢えだけを糧に生き続けてきた手鬼の呪縛を祓ったのだ。

炭治郎は筋肉疲労により激しく痛む足も気にせず、塵芥になって消えていく手を、そつと優しく握る。己を殺そうとしたモノであろうと関係ない、今も昔も同じだ。せめての手向け前世のつもりだった。

鬼となり、沢山の人を殺してきた事は絶対に許せない。それでも、手鬼もまた無惨に運命を狂わされた可哀想な生き物だ。

許す事はできなくても、悲しみに寄り添うくらいの救いはあってもいいと炭治郎は思っていた。「どうか成仏してください」と、祈るくらいなら。

炭治郎の考え事

「昨日、最終選別が行われた。その結果を聞いた時、私はとても驚いて、同時に懐かしい気持ちになったんだ。どうしてだか分かるかい？

義勇」

「……いえ」

春の木洩れ日が差し込む室内にて、向かい合うは鬼殺隊の最高責任者と、その中核たる柱。産屋敷耀哉と富岡義勇。凧を思わせる静寂が何度も場を包み込んだ。

素っ気なく聞こえる返答も彼ならばただただ愛おしい。義勇へと軽く微笑みを返すと、自らも平坦な口調で本題を伝える。

「君の時と殆ど同じ事が起きたからだよ。試験を受けた者全員が生き残り、最終選別を突破した。たった一人の尽力によってね」

「……！」

「まさに錆兎の再臨。しかも今回の当事者である彼は生き残った。……素晴らしいね、今年もまた溢れんばかりの才能を持った子供が増えた。喜ばしい事だ」

流石の義勇も僅かにはあるが瞳を見開き、大いに驚いた。胸の内に来るのは錆兎の勇姿と、悔やみ続けた無為な日々。自らの罪が陰りとなって顔に現れる。

それを見越していたかのように、産屋敷耀哉は落ち着くよう声を掛ける。その声音は一時的にはあるが、義勇に平静を齎した。

「本題はここからなんだ。その件の人物というのが、前に義勇から報告を受けた少年だった。無惨に家族を殺され、妹を鬼に変えられた炭売りの少年」

「炭治郎が、ですか？ ……しかし、炭治郎を我が師である鱗滝左近次に紹介したのは3ヶ月前です。何かの間違いという事は……」

「あまねが直接藤襲山で確認した。大器だったそうだよ。——もし彼の妹を殺していれば我々とは袂を分つしかなかつただろう。お手柄だね義勇」

俄には信じ難い話だった。炭治郎に光る物を感じたのは確かだが、それにしても不明瞭な点が多すぎる。

何故3ヶ月の鍛錬のみで最終選別を受けているのか、それが分からない。どのような日々を過ごせばその短時間で錆兎の域に達する事ができるのだろうか。そもそも師は止めなかつたのか？

一番に考えられる仮説としては、あの日の邂逅時で既に炭治郎の強さは完成されていた、というもの。これが最も合点いくと思う。鬼舞辻無惨と遭遇し、生き残るだけの力があれば錆兎以上の芸当ができてしまうかもしれない。

「多分、義勇の考えと私の考えは同じだ。炭治郎は膠着する現況の突破口になり得る可能性を秘めた存在、鬼舞辻の対応を見ても明らかだ。分かるだろうか？」

「同意します」

思い返すは炭治郎と出会ったあの日。兄妹と別れた後、義勇は其処からほど近い場所で鬼と戦闘になっていた。それも2体の鬼だ。

実力的には義勇の方が大きく上回っており危なげもなく勝利したのだが、しこりを残した形での勝利だった。その鬼達の特殊性は産屋敷耀哉も注目していた。

まず一番に、鬼達がそれぞれ血鬼術を使用した事。次に徒党を組むどころか連携を取っていた事。最後に炭治郎の殺害が目的であると口走っていた事。

十中八九、無惨からの刺客だろう。普段徒党を組まない——否、組めない鬼が血鬼術を駆使して同時に襲ってくるなどあり得ない事態だ。それも雪雲が空を覆っていたとはいえ、日が昇っている状態なのに。

「無惨にとって、炭治郎はよほど邪魔なんだろうね。近頃各地で鬼による被害が増加傾向にあるのも炭治郎の一件と完全に無関係とは言い切れない。無惨は自らの足取りを悟らせまいと慌てふためている事だろう」

「では……私は」

「鬼殺隊として活動していれば自ずと信頼は築き上げられていくだろう

うけど、それでも納得できない子は出てくるよね。少なくとも、炭治郎と禰豆子の事はまだ他の柱達には報告できない。だからもしも信頼の完成を待たず、途中で禰豆子の存在が露見した時には、炭治郎を庇ってあげて欲しい」

鬼の助命を願う鬼殺隊の最高責任者など、後にも先にも自分だけかもしれないと、心の内で自嘲が込み上げる。結果によつては先祖や命を散らした者達に顔向けできない事態に陥る事だつて考えられるのだから。

禰豆子の存在はそれだけ不確定要素を多く孕んでいた。

だがそれでも利が損を上回ると判断した。炭治郎は勿論のこと禰豆子だつて特別だ。鬼らしからぬ特徴を持つ彼女は恐らく無惨の制御が効かない存在。彼奴にとつて想定外の一撃となり得る持駒は一つでも多いに越した事はない。

「分かりました。この件は師の鱗滝にも伝えて、我々2人の名で一筆認めようかと。……炭治郎は不在の水柱を埋めるに足る逸材です。どうか私からもよしなにお願いたします。お館様」

「勿論。ただね、水柱はキミだよ義勇。水の使い手でキミが柱である事に不満を持つ者は誰も居ない。それだけの実績と信頼があるんだ」「しかしそれも炭治郎が私を超えればいいだけの事です。錆兎と同等の働きをした炭治郎ならば容易いでしょう。是非、次期水柱は炭治郎に」

困ったものだ、と。笑顔の裏で義勇の悪癖について思案する。それこそ竈門一家襲撃の少し前に半ば無理やりに近い形で柱に就任させたのだが、それ以来事あるごとに水柱の辞退を申し出るようになってしまった。

今の情勢下で水柱を不在にさせるのはまず無理だ。しかも義勇は若く、歴代最高に近い水の呼吸の使い手である。彼以上の適任はいない。

それに――。

「炭治郎は水の呼吸じゃなくて、専ら父親から受け継いだ新種の呼吸を使っているそうだよ。つい最近では杏寿郎に師事して炎の呼吸を

練習してたみたいだし、何にせよ水柱になるのは難しいんじゃないかな

「え?」

「うん」

◆

最終選別から10日経ち、その間炭治郎は鱗滝の元でゆっくり身体を休めていた。筋肉疲労の酷さに歩くことすらままならない状態だった。呼吸を何度も切り替えながら昼夜を問わず駆けずり回ったツケである事は言うまでも無く、鱗滝も今回ばかりは炭治郎に休養を命じる始末。

何度倒れそうになっても強靱な意志で踏み止まり、刀が折れたら負傷者から新しい刀を借りて、兎に角戦い続けた一週間だった。

最終選別後、藤の花の下に集まった参加者達から口々にお礼を言われた。「ありがとう、いつかキミのような剣士になりたい」と言ってくれる者まで居て、こそばゆさを感じたものだ。

勿論いい事ばかりではなく、最終選別に生き残っても心に深い傷を負ってしまい怯えた様子で帰路に着く者、剣士を諦めて”隠”としての活動を誓う者など様々だった。そんな彼らの痛々しい姿を見た炭治郎は、声を掛ける事しかできない。「キミの分まで頑張る。キミの想いを背負って俺は戦うよ」と。

自らの無力さに打ちひしがれている者達には酷な言葉だったかもしれない。だが鬼を倒し、人々を救いたいと願う気持ちは皆一緒な筈だ。

鬼舞辻無惨は自分が倒す、だからどうか安心して欲しいと。そんな想いを込めての言葉だった。

と、縁側でぼんやりしていた炭治郎の傍に鱗滝が腰を下ろす。未だに眠り続ける禰豆子の様子を時折窺いながら、空いた時間には炭治郎と様々な事柄の情報共有に努めている。炭治郎の気分が落ち込み過ぎないように気を遣ってくれてるのかもしれない。

「どうした炭治郎。考え事か？」

「いえ、最終選別を思い返してました。誰も死なせなかつたけど、みんな進んだ道はバラバラだった。俺の刃は果たして彼等にとつて真の意味での救いとなったのだろうかなんて、ふと思ったりするんです」

「お前が居なければ同期の殆どが死んでいた……それだけが事実だ」

返答が早い。

「隊士となった者、辞退した者の全員がこの後も平穩無事に生き残るのは難しいだろう。我等の世界は突然の死に溢れている。今回の結果は先延ばしに過ぎないのかもしれない。それでも、失われていた筈の可能性を繋げることができたのだ。我が弟子としてそれ以上に誇らしい事などそうそうあるまい」

炭治郎の行動理念に通じるものがある。むしろ鱗滝はそれを見越してこんな言葉を掛けてくれたのかもしれない。嬉しい気持ちになると同時に、脳裏にひとりの少女の顔が浮かび上がった。

アオイは……元の世界では最後まで後方支援に努め、後悔を募らせたままであるが無事に鬼の居ない世を迎えるに至った。だが今回は如何だろうか。

『貴方のおかげで生き残る事ができました。ありがとうございます。……本来ならば私には隊士たる資格はありません。実力も気構えも不十分である事を痛感した次第です。でも——貴方が刀を拾ってくれたから、本当に大切なモノは喪わずに済みました』

別れる時、彼女はそんな事をはにかみながら言っていた。その時は特に考えもせず「うん！ 頑張れ！」と激励のつもりで答えたのだが、よくよく考えるとあれで良かったのか？ とも思える。

自分の介入の影響でアオイが挫けず無理をしてしまい、鬼に殺されてしまう未来だってあり得るだろう。そんな事になってしまえば伊之助に顔向けができない。

改めて、この世界における竈門炭治郎の存在は諸刃の剣なのだと思識した。初めから薄々勘付いてはいたのだが、それを強く意識してしまうと一挙手一投足に迷いが生じてしまうと思つたから。

やはり自分で全てを抱え込んでしまうのかと。苦心し俯いてしま

う炭治郎に対して、鱗滝から言える事は何も無い。

鱗滝もまた悩ましげに息を吐くと、炭治郎の頭に手を乗せる。

「何にせよ此度の件でお前と彼等の間にできた繋がりはいずれ有益なものとなるう。同期は兎に角大切にする事だ」

「……はい」

その言葉を最後に、鱗滝は居間に戻った。

善逸、伊之助、カナヲ、玄弥……。今もなお自分の同期といえはこの4人であると炭治郎は思っている。生死を最も共にした彼等は鬼殺隊の中でも特にかげがえの無い、それこそ親友と呼ぶに相応しい者達だった。

だがその一方で今世での同期はどうかと言うと、本来なら先輩として敬うべき者達である為、完全な同期として見る事ができるか心配だったりする。それになんだかんだ癖の強い者も何人か居て、自分とまともに取り合ってくれない者もちらほら。

特に鱗滝と善逸を自分と関連付けて罵倒していたあの男……確か名前は獺岳かいがくと言ったか。初対面の彼が炭治郎に向けていた理由の無い敵意は並ならぬものだった。

最終選別終了後に折角の同期なんだから仲直りをしておこうと話し掛けに行つたのだが、選別前よりもさらに苛烈な敵意を以って応じてきた。理不尽である。

これからの安否が心配なアオイ。

自分へ敵意を抱きながら突つかかってくる獺岳。

何故か先輩扱いを強要してくる変な人。

もう色々だ。

ただでさえ悩み事が多いのに、同期の数だけまた新しい悩みが生まれてしまった現状に、やはり炭治郎は頭を抱えてしまうのだった。

考え過ぎて耳の穴から溶けた脳味噌が流れ出てきそうだ。

(もう俺一人じゃ整理つづきが付けられない……！ 誰か頭が良くて、今の状況を包み隠さず具つづきに共有してくれる人が欲しい……ッ！)

そもそも前世、今世通して炭治郎が作戦立案に携わった事は一度も

ない。現場指揮ぐらいならまだできそうであるが、それとはまた別次元の話だ。

やはり自分には大筋の方向性を定めてくれる人が必要なんだと、切に痛感している。

炭治郎の現状を含めて何でも相談できる者が居るとすれば、この世界では貴重な存在となろう。認めたくない弱さではあるが、ただ単に孤軍奮闘し続けるのが寂しいといった想いもあるのかもしれない。

故に炭治郎の頭に一つの選択肢が色濃く浮上する。

鬼殺隊の面々と情報共有できればそれに越した事はないが、信じてくれないければそこで全てが終わってしまう。鱗滝とてそうだ。柔軟な視点で物事を吟味できるお館様ならもしかしたら、なんて考えも浮かんだがそもそも一般隊士の身では彼に会う事は難しいだろう。

ならば珠世と愈史郎ならどうだろうか？ 彼等もまた幾つか考えられる障壁はあるが、それが一番現実的な案であると炭治郎は判断した。情報共有という点でもそうだが、あの二人と対無惨の共同戦線を張るのは必須であり、その時期が早ければ早いほど鬼殺隊へ優位に働くことは間違いない。それに彌豆子を診てもらおう事も今後を踏まえれば大切な事だ。

前世でもあんなに頼りになる人達だったのだ。同期云々の悩みは兎も角として、頼れる助言者にもなってくれるだろう。

考えは固まった。やはり珠世、愈史郎との合流は最優先に行うべきだ。

そろそろ鋼鐵塚が日輪刀を持って来てくれる頃だろうし、その後は鎧鴉から初任務が言い渡される筈。それを鑑みると、機会は任務と任務の間に存在する限られた空白時間か、浅草で任務を行う時くらいか。

なににせよ目指すは浅草だ。それが最善策なのかは分からないが、自分が考え出せるのはせいぜいこの程度。ならば、それを信じて進み続けるしかない。

いざ浅草

「鋼鐵塚さん、この世界でも変わらなかつたな。相変わらず色々と凄いい人だつたけど、やっぱりあの人が打つてくれた日輪刀は手に馴染むような気がする。いつかまた刀鍛冶の里に行こうな彌豆子」

「むー」

「そういえば煉獄さんと甘露寺さんから返信が来たんだ。二人とも書面いっぱい褒めてくれて嬉しかったな。義勇さんからはやっぱり返信無かつたけど」

「むう？」

「早くみんなに彌豆子の事も紹介してあげたいなあ。兄ちゃん頑張るから、もう少し待っててくれよ彌豆子」

数日前までの陰鬱な気分はどこへやら、炭治郎は明朗快活に軽快な足取りで街道をひた進んでいた。途中何度も笑いながら背負った箱へ言葉を掛ける。明確なそれが返ってくる訳では無いが、彌豆子の存在を感じるだけで炭治郎は満足なのだ。

初任務へ発つ直前だった。数ヶ月眠り込んでいた彌豆子が突然目を覚ました。

眠る彌豆子を戦いの場には連れて行けないと、鱗滝の元に預ける予定だったので、炭治郎の喜びは大きかった。やはり彌豆子とはずっと一緒がいい。

とはいえ、一応の返事はあるものの、本当に炭治郎の言葉の意味が分かっているのかは少し不安だ。自分と同じく『前回』の記憶があるのかもしれないと思い、なるべく未来の事を話そうとしているのだがどうにも曖昧である。

「ただいまあ、今はこれでいいと思う。」

「彌豆子と一緒にいれるだけで幸せだから。」

さらにもう一つ、炭治郎にとって良い方向に好転した事がある。というのも、鎧鴉より告げられた初任務の場所が運の良い事に浅草だったからだ。

詳しい内容については語られなかったが、どうやら鬼の関与が疑われる事件が相次いでいるようだった。次の死人が出る前に急げとのこと。

そういう訳で、鬼殺隊としての最初の出だしは順風満帆といっても差し支えない良い滑り出しと言えよう。

ただ、炭治郎は手放しでは喜べない。

（運が良いって考え方は良く無いよな。任務があるという事はその地で鬼の被害が起きている事に他ならない。それを己の理由で喜ぶのは恥ずべきだ）

そうだ、全てが良い事ばかりじゃない。

浅草といえど鬼舞辻無惨が人間に擬態して暮らしていた場所である。そんな場所で奴や配下の鬼が安易に騒動を起こす訳がない。

しかし今回は“それ”が起こった可能性がある。

これの意味する事の重要性は何となく解るのだが、その内容を断定するには至らない。例えば何らかの理由で珠世達の存在が無惨に露見し、彼等を燻し出す為の行動なのであれば、早急に阻止しなくては。「禰豆子、浅草に着いても暫く箱の中に隠れていてくれ。万が一にでも無惨に目撃されるわけにはいかない。今回は鬼の調査と珠世さん達との合流が最優先だ」

「む……」

通常なら数日掛かる道のりも”常中”を再会得した炭治郎の体力であれば数刻程度で十分だった。日が沈む頃には閑散とした畦道から都市部に入り、そして浅草へと到着する事ができた。

紫色の夜空に爛々三日月が浮かぶ。

連なる山々のような聳立つ家屋には、まるで巨大な妖怪に取り囲まれているような、そんな錯覚を覚える。窓から溢れる鋭利な光が闇を切り裂き、擬似的な昼を演出していた。

やはり何度訪れても慣れないものだ。都会のあまりの眩さにモンゲーするしかない。

ただ、炭治郎の鼻と脳裏を駆け巡る直感、前回の浅草にはなかつ

た『狂気』を感じ取っていた。群衆に紛れて漂ってくる恐ろしい匂いに眉を顰める。

(何かがおかしい。鬼舞辻の他に複数の鬼の匂い……そこまではまだ分かる。だけど……道行く人々の中に紛れ込んでいる特定の人間。何食わぬ顔で今も表通りを闊歩している彼等が、今は何故か恐ろしい……！)

炭治郎がこれまで嗅いだ事のない種類の匂いだ。多幸感のみを心に宿し、一つの目的のために行動している。目からは正気が失われていた。

何らかの血鬼術を受け、操られている可能性は十二分にある。ひとまず珠世と愈史郎の搜索は保留とし、浅草に渦巻く『狂気』の調査を開始した。

すれ違う全員を具に確認して、裏に潜んでいるかもしれない鬼の影を追う。

またその途中、数人の鬼殺隊士を見かけた。どうやら今回の一件は共同任務の扱いであるらしく、それなりの人数がこの地に集結しているようだ。全員が全員釈然としない表情で右往左往している様だった。中には隊士同士で言い争ってる者達も居て、混乱の様相を呈している。

と、炭治郎はその中に見覚えのある顔を見つけた。

「こんばんは！ 最終選抜の時に知り合った竈門炭治郎です。えっと、貴方も同じ任務なんですね」

「おつ、炭治郎じゃねエか。お前も浅草に来てたのか！」

「はい。ただ状況が呑み込めなくて……」

「あの右往左往してる奴らはほっとけ。それよりさっさと鏝鴉に次の任務を打診しておいた方がいいぜ。浅草での任務はもうほぼ終わってる」

「そうなんですか？」

”先輩”^{同期}から聞いた事の顛末はかなり複雑だった。

まずここに居る隊士達の殆どは別任務で鬼を追っていた者達らしく、目的の鬼が一齐に浅草へと逃げ込んだ為にこうして一堂に会する

事となったそうさ。その際に自分の追っていた鬼と誤認して他の隊士が追っていた鬼を斬ったりしてしまう事が頻発してしまい、指揮系統がグチャグチャになってしまってるらしい。かくいう先輩(仮)もその一人であったとか。

まあそんな異常事態ではあったものの、逃げ込んだ鬼は全て討伐されたようだ。そして未だに多数の隊士が浅草に留まっているのは、追加で与えられた別件の任務によるものだという。

余計に頭がこんがらがってしまった。

「隊は殆ど錯綜状態だが、取り敢えず俺はそここの鬼を倒したから撤収するぜ」

「え？ だけど追加の任務が——」

「『夜な夜な往来で自決する者が後を絶たない。原因を調査しろ』って内容だろ？ 労力や難易度から換算しても実績実入りに見合わねえ。それにちつとばかり昔にや大衆の面前で腹を搔つ捌いて自殺なんて事もあり得ないもんでも無かったし、そもそも鬼が関わってない可能性だってあるからな。上には『鬼の姿無し』とだけ報告しときゃいい。俺は堅実に出世したいんだよ」

「……もし仮に鬼が関わっていなくても、俺はそんな異常事態を見過ごせない」

鬼殺隊の理念からは些か外れているとはいえ、先輩(仮)の言い分も全くの的外れというわけではないだろう。あくまで今回の任務は『鬼の関与が疑われるので調査せよ』というもの。空回りになる可能性は十分ある。

でも最善を尽くすのなら避けては通れない道だ。どんな行動が如何なる結果になるうとも、なるべく後悔の無い選択肢を選ぶのが肝要。前世の時だって、遠回りが一番の正しい近道だった経験など枚挙にいとまがない。

「キミがどういった理由で鬼殺隊に居るのかは知らないけど、その姿勢は隊士として相応しくないとと思う！ 高邁な理想とまではいかなくてもさあ！ もつとこう……人助けは積極的にした方が！」

「へえ言ってくれるじゃねエか、勇ましいもんだ。悪りいが誰も彼も

がお前みたいに自己犠牲の精神で頑張れるわけじゃないんでな。利益優先の俺は遠慮させて貰うぜ」

「むう……い！」

説得失敗！

炭治郎の制止もどこ吹く風と、先輩(仮)は群衆の中に消えてしまった。価値観が違い過ぎて取り付く島もない。

不死川兄弟や伊之助など、最悪の初対面となってしまった者達とも最後には確かな友情を築く事ができた炭治郎だが、先輩(仮)に関してはどう接したのか悩んでしまう。

無理に仲良くする必要は無いと言ってしまえばそれまでだが、折角の同期なのだからなるべく蟠りの無いようにしたいものだ。

「というか、また名前を聞き忘れた。」

「仕方ない、他の人達と一緒に調査しよう。……あつ、あそこに集まっているな」

人工的な灯りで照らされている街の中なら鬼殺隊の黒い隊服もよく映える。合流を急ぐ炭治郎だったが、その最中に気付いた。

人の流れがおかしい。

集まっていた隊士達もその方向に引つ張られている。

「何があったんですか？ みんな固まって」

「件の自決だよ。今日は集団で、しかも大通りのど真ん中でやるらしい！ 止めに入ろうにも野次馬が邪魔で……い！」

隊士の一人が慌てた様子で手短かに状況を教えてくれた。その言葉通り、群衆の中からは「あいつら早く止める！」などの叫び声が聞こえる。警官も到着しているみたいだったが、手出しができないようだ。

そして何より、群衆の中央。狂乱する人々からは鬼の匂いがした。今回の件、やはり何らかの形で鬼が関わっているのは間違いないさそう

だ。
炭治郎の行動は早かった。群衆が壁になっていると知るや否や、襦豆子に断りを入れて地面に箱を置くと、助走をつけて一気に跳躍。密集する人々を飛び越えて、渦中の現場へと降り立った。

中では白装束を着た数人の女性が短刀を持って周りを牽制しており、警官達は足踏みを余儀なくされている。故に膠着状態に陥っていたのか。

「な、なんだあの子供!?! どっから現れた!?!」

「……!?!」

空から少年が降ってきた事で、場により一層の混乱が生まれる。自決を試みている女性達もそうだ。意識の空白が生まれていた。

その隙を突くように炭治郎は瞬く間に一団に接近、短刀をはたき落とす。反射的に女が掴み掛かろうとするも、それを受け流し手首を拘束。そして目線で警官へと合図を送り、無力化した事を知らせた。

数瞬遅れて気を取り直した警官が殺到し、残る女性達を取り押さえる。強い抵抗を見せるものの、力そのものは人並みだったようで簡単に鎮圧された。

暴れる女は、やはり半狂乱になりつつ警官の腕の中で蹴き叫んでいた。正気は完全に失われている。

「離せええええ!!! 私は此処で死ななきゃいけないんだあああッ!!!」

「いいから! 一度落ち着きなさい!」

「あゝあゝあゝ 教祖様お許しくゞだゞさいゝいゝいゝ」

(……尋常じゃない。何があの人たちをあそこまで駆り立ててるんだ? 恐怖と絶望の匂いでいっぱいだ)

全てが理解できなかった。

人間の狂気とはここまで峻烈なものになるのかと驚愕したし、何より彼女達にここまでまでの事をさせられる鬼の残酷さに身震いした。

彼女らを動かしたのは恐らく無惨では無い。奴の匂いは浅草中に蔓延しているが、彼女らに付着する鬼の匂いは無惨とは別のものであり、尚且つかなり近い。

それもとびつきり醜悪で、強い鬼。

(十二鬼月——それも上弦。いるのか? 上弦が……この浅草に)

周りを囲む群衆へと意識を向ける。咄嗟の事だったが、自分に向けられている視線の中から身を引き裂くほど鋭利なものを感じた。

この群衆の中に……いや、更に向こう側。
血を思わせる深紅の瞳が闇の中から覗いていた。

「鬼舞辻……無惨……ッ！」

間違いなく奴だった。浅草に到着した直後から炭治郎の存在を認知していたのだろうか、高みの見物に興じているように見えた。

すぐさま斬り掛かりたい衝動に駆られるが、動けない。状況がこの上なく悪い。

一般人が多過ぎるし、無惨からは距離があるため接近しようにもすぐに逃げられてしまうだろう。やはり奴を仕留めるには実力者達による包囲網が必要だ。

故に、菌茎が爆ぜる程に強く噛み締め、仇敵を睨む事しか出来なかった。そんな炭治郎の姿を見て、無惨は嘲笑うように闇の中に溶けていく。怒り、憎しみ、そして何故か安堵の匂いを残して。

その後、警官からの事情聴取から逃れる為にそそくさとその場を後にした。鬼殺隊は非政府公認組織である為、ふとしたところで不便である。本来なら先ほどのような行動もなるべく控えるべきなのだろうが、動かすにはいられなかった。

そんな事情は兎も角として、同僚達からは随分と褒められた。「新人があのような活躍を見せたのだから自分達も負けていけない！」と息巻いてすらいいて、やっぱり炭治郎はこそばゆい気持ちになるのだった。

事態の異常さを隊士全体が共有できたのもあって、鬼の関与を探る調査はもう暫く続けられる事になり、各自翌朝に集合する事を約束する。

炭治郎もまた追加の調査と、無惨の痕跡探しの為に単独行動を再開した。

「大変なことになったなー禰豆子。珠世さんの搜索はもう少し後になりそうだ。だからもう少し箱の中で我慢してくれ。ごめんな」

返答は無いが、箱の中からカリカリと木材を引っ掻く音がする。”肯定”の意が込められていると解釈した。

安心したらお腹が空いてきた。

ひとまず何処かで腹を満たそうかと頭巾を深く被り、人通りの少ない外れ道に入る。前はうどんだったから今回は蕎麦でも食べようかな……なんて、そんな事を考えながら鼻を利かせた。

鱈や煉獄家で食べた料理が不味いという訳では無いのだが（むしろ美味）繁華街で漂う料理の匂いはそれとは別種の味わいがあるものだ。

辺りを物色するように何となしに匂いを嗅いだ。

瞬間、鼻腔を焼くような鋭い痛みが走る。鼻がもげたのかと錯覚するほどの衝撃。

あまりに突然の出来事だった。小さな悲鳴を上げて鼻を抑える。もげていない。

「おいおい困るぜ。ウチの祭事を邪魔しないでおくれよ」

鬼の匂い。禰豆子じゃない、妹のものとは限り無く遠くて、無惨にあまりにも近い。あまりに強烈で、まず一番に自分の嗅覚を疑った。これほど強烈なのに接近に気付かなかったのか？

どこから？ 隣だ、すぐそば。

そいつは炭治郎の首に手を回し、耳元で囁いていた。

認識よりも先に身体が動いていたのだらう。日輪刀を引き抜き、その鬼の首が在るであろう場所へと一気に振り抜く。型も何もあつたものじゃない、焦りと恐怖が生んだやぶれかぶれの一振り。

それは掠る事なく空を切り、代わりに目の前に実態となつて現れる。

ビリビリと表皮を麻痺させる感覚、頭を巡る脳髓を焦がさんばかりの血液。

動きが速過ぎる。

炭治郎の肉眼では到底捉えきれない速度。

その鬼は余裕綽々といった様子で、炭治郎を眺めながらニヤついていた。二対の扇、頭から血を被つたような髪、闇夜を照らす煌びやかな目玉。そして、それに刻まれた『上弦』『式』の文字。

激しい動揺が不規則な呼吸となって現れる。

カナヲや伊之助から掻い摘んで聞いた話と合致する。

「祭事……？ 何を言ってるんだお前は」

「やあやあ初めまして、俺の名は童磨。とある宗教の教祖をやってる者さ。そして先ほど執り行われていたのはウチの重要な行事、我々が崇め奉る『神』^{無惨}が望まれたものなんだよ。君が邪魔したアレだ」

そんな事を和やかに語る。

聞いてもいない事までペラペラと喋り出す。

「——ただあんまり気持ちの良いものじゃないよねえ、人前で腹を切って注目を浴びてもらうなんて。おかげで敬虔な信徒を何人も失ってしまった。『万世極楽教』の教義は救いだからねえ。彼女達のような人間こそ、俺が食べてあげなきゃいけないのにな。可哀想に」

一言一句理解できない。

鬼の発している言葉が、自分の発しているそれと同じ言語なのか疑いたくなる。

「それに、あの祭事を執り行う羽目になったのは全部全部君のせいなんだよ？ あのお方を愚弄した耳飾りを付けた少年って君の事だろう？ それが巡りに巡って、俺がこうして駆り出されたって話さ」

「……」

「方に一つでもあのお方に害が及ぶ恐れがあるなら、しっかりと対策をしなきゃいけないからなあ。引越し準備中は大きな祭事でみんなの注目を集める事になったんだよねえ。悪戯に信徒を死なせたくなかつたけど、あのお方がお望みなら仕方あるまいよ」

情報を次々に開示する童磨。何か目論見がある訳ではなく、これから死にゆく哀れな少年への手向けのつもりだろうか。

なににせよ癪に障る話だ。

今まで出会った鬼の中でも、あの鬼は無惨と双璧を為すほどに醜悪な悪鬼なのだ、冷え切った心は判断した。『上弦の式』——紛れもない強敵。あの猗窩座以上の称号を持つ鬼。

勝ちの目は非常に薄い。それでも——

(逃がさないッ！ この悪鬼の首を此処で叩き斬つてやる……！)
どんだん力が湧いてくるのだ。恐怖と焦燥に震えていた身体に熱が滾るのを感じる。

ふと、脳裏にしのぶの顔がよぎる。

骸を残す事すら許されなかった。髪の毛の一本に至るまで目の前の鬼に吸収されてしまったから。その事を語ったカナヲの顔は、今も覚えてる。

「へえ、挑んでくるんだね！ 実力差はハッキリ理解していると思っただけけど……全く度し難い。だが俺はそんな君の無謀な決意を称えよう！ 頑張ったら一太刀だけでも入れられるかもしれないよ」

奴の言葉に耳を貸すな。集中しろ。匂いで分かる、童磨の言葉には何の感情も含まれていない。ただ空虚なだけの戯言だ。

鬼を倒せばこれから食われる運命だった数十人の人が救われる。それが上弦ともなれば数百人、数千人。それに、それだけじゃない。

こいつを此処で倒せば、しのぶさんを救えるかもしれない。その希望と、雪辱を果たそうとする激情が炭治郎に力を与えてくれる。

(思い出せ……カナヲと伊之助が教えてくれた童磨^{上弦の式}の血鬼術を……！)

無限城で討滅する事が出来たんだ。倒せない相手じゃない！)

上弦の式

『二人とも喧嘩はやめろ！ 互いに謝れ！』

『ダメだ!!! 俺の方がスゲエ！ 柱は俺だ!!!』

『そんなこと言って鬼を極限まで弱らせたのはしのぶさん、トドメを刺したのはカナヲちゃんだろお？ それに引き換え俺は一人で倒したからなあ〜！ この時点で鳴柱内定済みつてもんよ！』

『睦と式じゃ雲泥の差だろうが！ 柱は俺だ!!!』

『いいや俺だ!!!』

在りし日の出来事が鮮明に甦る。

そうだ、あれは確か最後の戦いから2年くらい経った頃だったか。善逸と伊之助が取っ組み合いながら喧嘩していた時があった。

発端は善逸が執筆した嘘っぱちの武勇伝、その一節。善逸が見事上弦の睦を討ち果たし鳴柱に就任した場面についてだ。

よせば良いのに善逸がわざわざ伊之助に善逸伝を読み聞かせたものだからもう大騒ぎ。禰豆子が買ひ物に出掛けていたのがせめてもの救いだっただ。

そもそもの話、善逸が上弦の睦を単独撃破したのは事実だが、善逸伝の中では何故かその対象が妓夫太郎に変更されていた。無限城で倒した上弦について頑なに詳細を語ろうとしなかった。

その理由については人伝に聞いていたので大雑把に把握しており、故に炭治郎がその件を深く追及する事は無かったが、それはそれで捏造もどうかと思う。

話が逸れたが、そんな経緯だ。二人の争いはどんどん過激に発展し、やがてどちらが凄いか、という話になった。

その上で指標になったのが自分の倒した上弦がどれだけ強くて厄介だったか、という訳だ。取り敢えず伊之助が特に興奮していたので、彼の言い分を聞いてあげたのを覚えている。

「どうしたどうした。戯れは始まったばかりじゃないか。もっと”例

の呼吸”を見せておくれよ。あつ！もしかしてもう肺が駄目になっちやった？」

「ぐ、う……！」

「苦しいよねえ、辛いよねえ。次はもっと優しく迎撃してあげるから頑張ろう！」

(すまない伊之助。あの時少しでも疑ってごめんな)

伊之助は恐ろしいほど正確に、童磨の脅威を炭治郎へ伝えていた。強大且つ凶悪な血鬼術は勿論のこと、身体能力もまた条理から逸脱している。

相對して一番に放った『円舞一閃』は間違いなく童磨の不意を突いていた。その後には繰り出した『烈日紅鏡』も悪くない速度で、隙の糸もしつかり捉えていた筈。だがそれらはあつさりと躲された挙句、軽い反撃すら躲しきる事ができなかった。肺の調子がおかしい。

奴の血鬼術が氷の粉を撒き散らすものであるのは既に知っている。だが想定していたよりも範囲が広く、細かい粒子で構成されている為に、炭治郎の感知能力で完全に捉えるのはほぼ不可能。

自慢の鼻も冷気で凍りつき、その長所の大部分を失っている。

たった一瞬、血鬼術を浴びただけで炭治郎の強みの殆どが封殺されてしまった。

しかも童磨は全く本気を出していない。

(あまりにも戦い辛い！ 鬼の首を斬るにはどうしても近付かなければならないのに、宙に漂う氷の粉が邪魔過ぎる……！ ただでさえ奴自身の速さを捉えるのでやっとなのに……！)

「ほらほら、近付かないと俺は斬れないよ。もつと積極的においでよ」隙だらけにしか見えないのに、全く隙がない。

いや、自分の身体能力ではどう足掻いても童磨の動体視力と迎撃を振り切る事ができないのだ。近付いても血鬼術を躲すので精一杯になつてしまうのは目に見えてる。せめて無限城で戦った時と同程度の肉体さえ有れば……。

(無いもの強請りをしてもし方がないだろ！ 今ある手札で勝つんだ！)

「あらら来ないのかい？　なら俺から行くね」

童磨が扇を振るえば空気が凍て付き、宙に蓮が咲く。生え出た蔓は恐ろしく正確な精度で炭治郎を絡め取ろうと伸縮し迫る。

一度でもアレに囚われてしまえば勝負は決してしまふ。そんな予感めいた焦燥が頭を埋め尽くした。回避ではダメだ。迎撃するしかない。

—— ヒノカミ神楽　日暈の龍　頭舞い

灼熱を纏った斬撃で広範囲を薙ぎ払い、氷粉ごと蔓を散り散りに消し飛ばす。さらにその勢いを殺さず『生生流転』の要領で舞の速さを加速的に増幅させていく。

迎撃だけでは此方が只管消耗するだけだ。反撃に転じる必要がある。ならば、その両方を一度にこなしてしまえばいい。血鬼術を突進で打ち破り、童磨の首を狙う。

「良い動きだ！　やるね」

(いけるッ！　鬼の首を切断できるッ！)

龍の畝りが如き舞から繰り出された渾身の一撃は、容易く扇に阻まれる。悲鳴嶼行冥ほどの剛腕であれば童磨の迎撃も突破できたかもしれないが、炭治郎ではどうひっくり返っても鬼の腕力に敵う筈もなく、あっさりと弾き飛ばされた。

(動きと呼吸の質は良いけど、身体がそれに全く追い付いていない。不思議だな。まるで大人の知識を持った赤子のようだ。可哀想に……これからどんどん強くなれたらうに、俺と出会ってしまったばかりに)

炭治郎の位置は既に血鬼術の射程内。しかも未だ滞空しており、体勢も崩している。確実に致命傷を与えるに足る状態。

若き命を散らす少年に哀悼を示しつつ、扇を翻す。

『凍て曇』は瞬間凍結に秀でた技。まともに浴びれば戦闘続行は絶望的だ。

だが炭治郎は退かなかった。僅かの中に空中で体勢を立て直し、童

磨へと照準を定める。元から弾き返されることなど想定内。童磨の首を狙うのは二段構えの型だ。

途端、童磨の動作に鈍りが生じた。なまじ身体能力が高いので、僅かな違和感を見過ごさない。否、見過ごせなかったのだ。

日輪刀に陽炎を纏う。

(おや？ 刀身が揺らいで——)

—— ヒノカミ神楽 飛輪陽炎

噴き上がる鮮血とともに童磨の視線が真上を向いた。これには然しもの童磨も自らの身に起きている事態を把握するのに数瞬の時間を要した。

灼けつくような痛み。どこを斬られた？

首だ。切先が首を掠めたのだ。あと拳一個分でも深く斬られていれば完全に切断されていたかもしれない。

「おかしいなあ。あの距離だと当たらないと思っただけ、まるで刀身が伸びたようだった。面白い技を使うんだね！ それに俺に一太刀入れてみせた！ 何の意味も無かったけど褒めて然るべきだ」
惜しめない賞賛のつもりなのだろう、童磨は愉快そうに手元で扇を弄んでいる。にやにやと此方を侮る顔は変わらない。

着地と同時に改めて距離を取り日輪刀を構える。弱音を吐き出しそうな程の絶望が背筋を伝うが、勇気と怒りで無理やり抑え込んだ。飛輪陽炎で仕留められなかったのはかなりの痛手。僅かに実力と運が足りなかった。

(他の手を、考えなくては……！ 幾ら俺を侮っているからって、二度は喰らってくれない筈だ。何でもいい、打開策を)

童磨の血鬼術を都合よく突破できる技なんてそうそう無いし、何よりあの鬼はヒノカミ神楽をじっくり観察している節がある。いずれ通じなくなるかもしれない。

場所を移して奇襲するのも手だが、そもそもこの『路地裏』という戦闘状況は炭治郎にとって有利に運んでいるのだ。自分が動き回れ

るだけの道幅は確保できてるし、何より一般人が滅多に来ないだけで、戦い易さは全然違う。もし何かの拍子に大通りに出てしまう事があれば大惨事だ。此処で食い止めたい。

「いやはや愉快愉快。こんなに楽しい戦いは少し前に花の呼吸を使う子を殺した時以来だよ。あのお方には改めて感謝しなければ。普段はこんな大命を任せられる事が少ないからなあ、こういうのは大抵、黒死牟殿か猗窩座殿がやってるんだよねえ。まあ今回はその黒死牟殿が何やら不調みたいだから、こうやって俺に——」

「黙れ。どうでもいい」

心の奥底から湧き上がる激情に身を震わせる。後半の言葉は頭に入ってこなかった。

「お前が楽しんで殺した花柱は、俺の大切な人達のお姉さんだったんだ。何故お前達は悪戯に人の命を奪い、あまつさえ弄ぶ？ 命を何だと思ってる？」

「おいおい一言一句違ってるぜ。俺は命を尊重してるさ、なんなら長生きしてほしいと思ってる。だから骨まで食べてあげて、この不死の身体と共に永遠に生き続けられるようにしてあげてるのさ。それに花柱の子だって、戦いが楽しかっただけで殺し自体を愉しんでたわけじゃ無いよ」

やはり理解できない。脳が理解を拒んでいる。

「寧ろ残念だったなあ。彼女、優しくてかわいかったし、きちんと食べてあげたかったよ。運悪く朝日が昇っちゃってねえ。でもあの子って妹が居たんだ！ そうかそうか、きつとあの子に似てかわいいんだろうなあ。いつか会ってみたいね」

「その必要はない。お前は今日ここで塵になって消える。お前のような醜悪な鬼を野放しにはしない」

「相変わらず威勢が良くって嬉しいね！ だけどごめんね、もうそろそろ終わらせないとあのお方がカンカンだからさ」

無惨が何らかの信号を送っているのだろうか、若干の響めつ面で頭を叩く童磨。そして、消えた。

「……ッ！」

「つと、躲したか」

直感に従ってしやがむと同時に、頭上を扇が切り裂く。動きが全く見えなかった。

即座に振り向き様に刀を振るうが案の定当たらず、悠々と扇を振り下ろす童磨の姿。これは躲せない。正確には、扇の一撃に付随する血鬼術が躲せない。

炭治郎の決断も早かった。被弾覚悟での反撃を試みる。

結果として、一連の攻防を制したのは炭治郎だった。

童磨の腕は切断され宙を舞い、炭治郎の斬撃が胴を一刀の元に両断。予想外の横槍に童磨は接敵を中止し、一足飛びで距離を取った。顎に手を遣り、飛び出た内臓を逆再生のように仕舞っていく。

「……何を背負っているのかは気になってたけど、まさかそんな可愛い女の子を入れてたんだね。しかも鬼か。妹さんかな？」

「禰豆子ー」

道具箱を突き破り、手刀で童磨の凶刃から炭治郎を守った。もし禰豆子の横槍が無ければ今頃は再起不能に陥っていただろう。

九死に一生を得たが、状況は更に悪化した。変に禰豆子を庇いながら戦えば、あつという間に童磨に一網打尽にされてしまうかもしれない。

「へえ、人間と共に行動する鬼か……。興味深いけど、あまり良くないね」

「オイこつちだ！ あの変な帽子を被ってる野郎が鬼だぜ！ 囲め囲め絶対逃すな！」

童磨に対して極限まで集中力を割いていたからか、第三者の接近に全く気付かなかった。周りを見渡せば十数人の鬼殺隊士が次々と童磨を包围している。同じ任務に当たっている同僚達だった。

童磨のあまりの存在感に気を取られており、禰豆子が鬼である事は気付いていないようだ。

「遅くなっちゃった、すまねエ炭治郎。一人でよく持ち堪えてくれたな」

「君は……この任務から降りたんじゃ……」

「気が変わったんだよ。それに、お前はどうも引く力が強いように見えたらからな、泳がせて様子を窺ってた方が鬼に近付けると思った」

悪びれた様子もなく包囲網に加わっている先輩（仮）

彼曰く、炭治郎の後をこつそり尾行していたわけだが、童磨との戦闘が始まると同時にその場を離脱。戦力を集結させるべく散らばっていた鬼殺隊の面々に声を掛けるため奔走していたとのこと。

「そして引いた鬼が上弦の式か……やっぱり只者じゃないなお前。俺の判断に間違いはなかったって話だ。こいつを倒せば一気に昇進！ 下手すりゃあ柱にすらなれるかもしれねエな！」

「だ、ダメだ！ よせ！ 上弦が相手では闇雲に人数を集めても……っ」

「怪我人は引つ込んでろ。大勢で一斉に叩けば強い鬼も殺れるさ。いくぜお前らア！ 手柄は山分けだ！」

「お、おう！」「やってやるぜ！」「仲間の仇！」と、各々思い思いに威勢よく雄叫びを上げて童磨へと突撃する。多人数で少数を叩くのは戦の常道であり、対鬼での戦闘でも間違った話ではない。

結束という強みこそ、鬼殺隊が鬼に対して優位に立てる数少ない要因である。

上弦の前には無意味だ。

十数人の鬼殺隊士は、一瞬にしてその大多数が氷漬けとなり、戦闘能力を消失した。童磨が横に侍らせているのは氷の巫女像。その発する吐息が広範囲を瞬く間に凍結させたのだ。

「冷たッ！」

「なんだ!? 俺たち何された!？」

「うーん、女の子は居ないのか。残念だなあ」

（まずい……!）

氷に囚われた隊士達に対して、童磨はあつさりとした様子で扇を振り上げた。彼等の頭上に冷気が渦巻き、鋭利な三角錐が高速で生成されていく。

氷柱、それも天を埋め尽くす大量の。一網打尽にする気だ。死人が

出る。それも沢山、大勢死ぬ。

脳からの信号の一切合切を無視し、炭治郎は自らの身を死地へと投げ出した。

（いけるか!? これだけの広範囲を果たして『灼骨炎陽』で——いや、受け切ってみせる。俺の目の前でむぎむぎと人を死なせてなるもんかッ!）

「禰豆子! 後ろ4人を頼む!」

「……!」

豪雨の如く降り注ぐ氷柱を真っ向から迎え撃つ。灼熱の炎をまとった高速回転斬りを放ち、縦横無尽に駆け回りながら隊士の安全を確保しようと奮戦。

禰豆子もまた、氷柱を砕き、時には身を挺して人を守ろうと奮起する。

炭治郎はやり抜いた。上弦の式による猛攻全てを捌き切り、一人の死者すら出さなかった。「どうせみんな殺されちゃうから無駄なのに」なんて事を言いつつも、その愚かさを貫き通したのは賞賛に値すると、相変わらずの巫山戯た様子で拍手喝采を送る。

「た、炭……治郎……!」

「少し前に、俺の鎧鴉が飛び立ちました。もうすぐ増援が、もしかすると柱が、来てくれると思います。お願いします、ここにみんな居ると……奴の血鬼術の正体を……どうか、伝えて欲しい!」

比較的炭治郎の近くに居た事で凍結の度合いが軽く、禰豆子に救われた為無傷な先輩（仮）に懇願する。もう増援に望みを賭けるしか窮地を脱する手段が見つからなかった。失血で頭がクラクラする。

腕と腿の裂傷が酷い。右腕に至っては氷柱が貫通していた。以後、満足を刀を振ることは難しいだろう。オマケに肺もやられたらしく、呼吸をするたび血が込み上げてえづきたくなる。

それでも最後まで抗ってみせる。

その僅かな時でなるべく多く童磨に斬撃を叩き込んでやるのだ。自分が立っている時間だけ他のみんなが助かる可能性は高くなるから。

勿論、彌豆子だって死なせない。炭治郎の代わりに前に出ようとする彌豆子を必死に押し留める。

「クソ……！ 死ぬなよ炭治郎！」

先輩（仮）が走り去るのを見送って、改めて構える。

増援を待とう。だが、勝利は諦めない。

「可哀想に……そんな身体でよく頑張ったねえ。偉いねえ。もう立つだけでも苦しいだろう？」 例の呼吸もたくさん観察できたし、結構楽しめたよ。じゃあ、そろそろ終わらせて——ツと」

円舞一閃での正面からの奇襲。負傷により威力は大きく削がれているものの、これが今の炭治郎に出せる最大限且つ最後の一撃だった。それすらも童磨の驚異的な反応速度で抑え込まれるが、構わない。

腕から血が噴き出る程の力で日輪刀を振り抜かんと、童磨を後方へと押しやっていく。傷付いた者達から引き離すのだ。最大限、精一杯に。

「彌豆子——ッ！ みんなを連れて逃げろお——ッ!!」

「まだまだ元氣だね！」

二対の扇から強烈な冷気が送り、目に見える程度の氷の粒子が鋭利な刃物となって飛散する。ある程度の規則性を持っているようで、より広範囲に殺傷能力を撒き散らすように動いているのが分かった。

つまり、時間をかければ逃げ場を潰される。

（伊之助は持ち前の感知能力で、カナヲは特別な目で観察して、この猛攻を掻い潜ったんだろう。俺は二人のように上手く出来ないけど、諦める理由にはならない。よく見て、よく感じて、判断するんだ）

特別というなら、炭治郎もそうだ。彼の視覚は至高の領域へと到達している。常時万全の状態で使える訳ではないが、それでも童磨の筋繊維の動きを逐一確認する事くらいなら可能だ。

奴の狙いを見定めて、一番被害の少なくなる場所へと突貫するのだ。

（見極める——見、極め——）

ひやり、と。全身に冷たい悪寒が走る。

「身体が回避は無理だと判断したのか、それとも氷で全身を引き裂かれたのか、一瞬判断がつかなかった。

そして視界は暗転した。」

「……あれ？」

困惑の声。自分ではない、童磨のものだ。

炭治郎もまた異変に気付いた。視界が暗転しているのに、一向に意識が無くならない。目をしっかりと見開いている筈なのに情報を捉えることが出来ない。

恐らく、童磨もそうなのだろう。

「来い炭治郎ッ！ こっちだ！」

自分を呼ぶ声がある。聞き覚えがある。

彼を知っている。だが彼が自分の名前を呼ぶ筈がないのだ。この世界で会うのは初めてなのに。それでも信用に足るのは確かだ。

暗闇へと手を伸ばし、彼の手を掴む。途端に視界が開け、炭治郎は暗闇から解放された。血鬼術が解けた……いや、別の血鬼術による上書きだ。

「愈史郎さんっ！」

「あんなのと真正面から戦う阿呆が何処にいる！ 今すぐ此処から離脱するぞ！ 珠世様の血鬼術とて、あの化け物相手に長くは保たん！」

世渡り上手

上弦の式、現る。

炭治郎の鎧鴉により齎された急報は、瞬く間に鬼殺隊を駆け巡る。相対したのは癸4名、壬2名、己2名、戊1名、丙4名の剣士であり、のちに駆け付けた柱2名も交戦している。うち柱含む3名を除き、全員が重傷を負う事態となったものの、奇跡的に死者は出なかった。

また一般市民への被害は『万世極楽教』の構成員を除き軽微。上弦の式が放った血鬼術による建物の崩落に巻き込まれた者が数名居ただけだった。

上弦の式は柱2名と戦闘中、夜明けを察知し撤退。首を斬るには至らなかったものの、容姿、素性、そして何より厄介な血鬼術の存在を把握できた点で鬼殺隊にとって有益な結果に終わる。

ついに上弦の鬼の尻尾を掴む事ができた。気が遠くなるほどの長い膠着状態を打開する一手となり得る出来事は、鬼殺隊に吉報として迎えられたのだ。

当然、その立役者である鬼殺隊士達は一躍注目の的になり、彼等の下へ詳細を聞きに行かんとする者は少なくなかった。故に数日の間蝶屋敷は面会者で溢れていた。

しかしパイプベッドに横たわる殆どの者は戦闘の詳細を語り切る事ができず、情報源は得意気に当時の様子を触れ回る唯一の軽傷者と、胡蝶しのぶの判断により面会謝絶とされた本件の立役者である炭治郎の二人だけだった。

「しかし思い返せばよく生き残れたもんだよ。俺は兎も角、お前ももうダメかと思っただぜ。血鬼術をまともに喰らって吐血してたしな」

「うん。正直生き残れても再起不能になる事は覚悟してたよ。でも……そう、奇跡！ 奇跡的に回復したのは運が良かった！」

「凄え顔になつてるけど大丈夫か？」

嘘は言つてない。嘘は言つてない……と。自分に言い聞かせつつ、白日を剥きながら唇を噛み締め、炭治郎はさもあつけらかなに答える。

先輩（仮）からの問い掛けのように、あの死地から生還した事への追及はそれなりにあった。特に蟲柱 胡蝶しのぶからの詰問はかなり堪えた。

善意からのものであるのは百も承知。それにしのぶに至つては漸く掴んだ姉の仇への手掛かりなのだ。情報を切に求める気持ちは痛いほど分かる。

それでも全てを語るわけにはいかない。まだその段階ではなかったからだ。

「それにしても蟲柱はおつかない人だったな。ありや相当頭に来てた顔だぜ。お前やっぱ質問に答えなかったから怨みを買つてるんじゃないか？」

「うう……やっぱり怒らせてるよなあ」

説明できなかつた事は主に二つ。

炭治郎は他の重傷を負つた隊士と比べて圧倒的に長く童磨と戦つており、血鬼術への被弾回数も相応に多かつた。しかし肺への異常が軽微だった為、今後も引き続き鬼殺隊員として活動するには問題ない程度の負傷に収まっている。

何故、童磨の血鬼術を何度も喰らつたにも関わらず、比較的軽傷のまま身体を後遺症もない状態に留める事ができたのか。これが一つ。

そして次に、しのぶ含めた柱が到着した時、何処に姿を消していたのか。先述した通り炭治郎は童磨との戦闘により浅くない傷を受けている。その場から痕跡を残さずに消える事は至難といえる。童磨が逃亡した後、ふらりと現場に戻ってきた事もおかしい。

勿論絡繰があるのだが、それは炭治郎の胸の内に留めておかなくてはならないモノであり、ましてや柱であるしのぶに報告する事は現時点では不可能なのだ。

そんな板挟みに近い炭治郎の状況を察したのか、先輩（仮）は神妙

な顔つきで頷く。

「どんな理由なのかは知らんがお前には恩があるからな、できるだけ口裏を合わせてやるさ。その代わり俺の活躍は華々しく語ってくれよ。頼むぜ」

「あはは……ありがとう」

曖昧に笑いつつ、炭治郎は件の時を思い返した。

◆

命からがらの逃走劇だった。珠世の血鬼術で視覚を奪い、同じく愈史郎の血鬼術で気配を消して炭治郎達は離脱を試みていた。愈史郎は虎視眈々と隙を見計らっていたのだろう、童磨の不意を突く事に成功し、完璧な手順と計画で翻弄したのだ。

だが、それでみすみすと獲物を見過ごすほど童磨は甘くなかった。仮にも上弦の式を任される程度に無惨から重用されているのだ。主の信任を裏切るような事があってはならない。普段浮っている童磨でも、最低限それだけの意識はあった。

視界を塞がれた？ 気配を感じ取れない？

単純明快、ならば全てを悉く粉碎してしまえばいい。この瞬間だけ、童磨は滅多に披露する事のない”本気”を垣間見せたのだ。

—— 結晶ノ御子

—— 霧氷・睡蓮菩薩

童磨の姿形と力を象った氷人形が合計で四体展開され、四方に向けて血鬼術を発動する。その破壊力は筆舌に尽くし難く、巨軀の仏像が腕を振り下ろす度に周りの家屋を粉々に吹き飛ばし、拡散した衝撃が放射状にありとあらゆるモノを凍結させていく。

もし愈史郎が鬼の脚力で炭治郎を引っ張っていなければ、命は無かっただろう。

これだけの破壊規模となればその惨状は大通りの人々も認知する

ほどになり、浅草は阿鼻叫喚の地獄と化した。惨禍を齎しているのが穏やかな顔つきをした仏像だというのだから、大いに皮肉めいている。

「愈史郎さんッ！ アイツを、アイツを止めないと！」

「いい加減にしろ馬鹿。今のお前じゃ命が幾つあってもアイツには勝てん。それより、もうじき到着する柱に任せるのが得策だ。……今は退け」

「けど、禰豆子や皆んなが……！」

「そつちは珠世様が対応している。安心しろ」

愈史郎に半ば引き摺られる形で場から離脱した訳だが、それは炭治郎に歯痒いやり切れなさを残す結果となる。巨悪を前にして自らの力の無さを改めて痛感した。

珠世と愈史郎の隠れ家は前回とは別の場所にあつた。当然のように愈史郎の血鬼術によって巧妙に秘匿されている。別行動中の珠世は禰豆子と共に遅れてやって来るとの事だった。

隠れ家に辿り着くと同時に愈史郎より語られたのは、この世界において炭治郎が最も求めていた言葉だった。

「それで、お前は相変わらず無鉄砲な奴だな。馬鹿は死んでも治らんらしい」

その言葉を聞いて、ホツとしたように炭治郎は脱力した。今になって童磨との戦闘の疲労が溢れてきた気がする。

「やつぱり……愈史郎さん、貴方は」

「そうだ。どういうわけか、今の時点じゃ存在しない筈の記憶がある。正直、死人と話している気分だ。お前が死んだ事は言伝に聞いたからな。一応、葬式の時はお前の妹にも挨拶しに行った」

「そうだったんですか!? あ……もしかして愈史郎さん、記憶があるって事は……もしかして。お亡くなりには？」

「さあな、よく覚えてない。長い年月を過ごすうちに思考と共に時間感覚も狂ってしまったのかもしれない。お前の言う通り、死がタイムス

リップの引き鉄だとするなら、多分死んだんだらう」

「たいむ……？ と、取り敢えず色々あったんですね」

自分と同じ境遇の人物がいた。初めて心の内を打ち明けるに足る人物が現れた。それだけでも相当嬉しいのに、それがあの愈史郎なのだから喜びは何百倍だ。それに、なんだかんだで自分の訃報を気に掛けてくれていたのを知って、なんとも言えない気持ちになる。

「ありがとうございます、ございます愈史郎さん。俺はもしかしてこの世界に一人きりなんじゃないかとずっと不安で……」

「俺は別にお前が居ようと居まいと構わなかったがな。珠世様に再び会えた事だけで十分だ。……それに泣き言を垂れ流す時間すら惜しい。あまり時間が無いからな、手短かに話す」

ぶつきらぼうに言い放つその話し方すら懐かしい。だがそんな感慨に耽る暇もなく、愈史郎は簡単な応急処置を施しつつ、矢継ぎ早に語り出す。

「ひとまずお前は外のほとぼりが冷めたら何気なく隊に合流しろ。俺との接触は絶対に鬼殺隊に漏らすなよ。前の時のような協力体制は珠世様の安全がしっかり確保できてからだ。茶々丸を付けておくから、何か情報を共有したい時はあいつを通せ」

「わあ！ 今回も協力してくれるんですね！ 珠世さんと愈史郎さんが居てくれるなら百人力だ！」

「ふん、珠世様の身の安全を脅かすような事はお断りなんだがな。だがあの方の悲願を無碍にする事もできんだらう、だからなるべく協力してやる。だからお前も死力を尽くして戦え」

不機嫌そうに吐き捨てる。

それもそうだろう、前回は鬼殺隊に協力する道を選択した結果、最終的に珠世は命を落とす事になる。愈史郎自身、あの時の珠世の判断に異を唱えるつもりは無い。それでも己の内に燻る忸怩たる想いを無い物として扱うのは、到底無理な話だ。

だから、と。愈史郎は炭治郎の肩を強く揺らす。

「俺はもう絶対に、珠世様を死なせたりなんかしない！ いいな、絶対だッ！ 俺からも言ってる。協力しろ炭治郎ッ！」

「つ……勿論です！」

頷く他ない。愈史郎も同じだったのだ。

もう二度と、大切な人の最期を見たくない。ただそれだけの想い。その時点で二人の思惑は完全に合致していると言える。

ふと、炭治郎は疑問に思う。

「珠世さんには俺達と同じような記憶、ないんですか？」

「……俺の話を受け入れてはくれたが、自分にはそんな記憶など無いと仰られていた。というか記憶持ちはお前の他に一匹だけだった。そこにいる茶々丸だ。お前は……一人だと言っていたな」

「そうですけど、もしかしたら禰豆子には記憶があるかもしれません。今はちよつとはつきり分からなくて」

「そうか、なるほどな。炭治郎、俺達の共通点は何だか分かるか？」

愈史郎からの問い掛けにたちまち思案顔になる炭治郎。じっくり考えて、彼もまた結論を導き出す。それしか考えられない。

「全員、鬼に一時的にでもなった事がある……」

「情報量からして暫定的だが、そうなるな。そして俺にはその他にも更に共通するものがあるように思えた。そもそも鬼になった事のある者が逆行の対象であるならば、珠世様やそれこそ鬼舞辻にも記憶がないとおかしいだろう。鬼の中にも何か条件があるのかもしれない」

もし仮に無惨に未来の記憶があるのなら、炭治郎や禰豆子を前にして逃げる訳がない。そして今まで倒した鬼の中にも存在しない記憶がある素振りを見せる者は居なかった。童磨だってそうだ。

やはり愈史郎は凄いと心から思う。自分との邂逅だけでここまでの仮説を立ててしまった。

「当然、俺達の他に過去に戻った人がいる可能性がある訳で……そうだ！ 例えばあの無惨に鬼にされた浅草住まいの旦那さんなら簡単にお話が聞けそうだ！ あとは鬼を斬る前にそれとなく記憶について聞いてみたりとか」

「結論を急ぐな。ここまでの話はあくまで全て仮定。お前のような馬鹿には難しい話かもしれんが、ありとあらゆる可能性を想定して慎重に行動しろ。此方の益となる以外の変化はなるべく抑えるように努

力すべきだ。先ほどといい、お前は無鉄砲過ぎる」

暗にこれまでの行動を咎められてしまった。確かに、目立ち過ぎたせいで童磨に見つかってしまったのは痛恨の失敗だった。しかも炭治郎の性格からして、上弦の式を前にして逃げるといふ選択肢は取れない。

しゅんとなつてしまう炭治郎。大きな溜め息を吐く愈史郎。

炭治郎という人間はつくづくこの特異的な状況下に向いてない。だがそれでも頗る頼りになるのだから、やはり不思議な少年だ。

「まあいい。今回のタイムスリップの究明については俺に任せろ。お前は兎に角、これからは自重しながら鬼を狩れ。着実に成果を積み重ねろ」

「成果、ですか」

「もどかしい気持ちは分からんでもないが、それでお前に死なれては本末転倒だ。それに、今のお前には上弦を狩るよりも先に成すべき大切な役目があるだろう」

「炭治郎、お前は『柱』になれ」

柱になる。

愈史郎から示されたまさかの方針。驚きを隠せないまま固まってしまった。

鬼殺隊最高位に立つ凄腕の剣士に与えられる称号であり、文字通り鬼殺隊を柱の如く支えている人類の至宝達。

当然、今も昔も炭治郎の目指すべき到達点であるのは間違い無い。なにより杏寿郎が今際に与えてくれた激励の通り鬼殺隊の柱となるのは課せられた義務のようなものだ。

しかしそれを何故愈史郎がこのタイミングで自分に改めて明示したのか、それが不思議だった。

「十二鬼月を仕留めるにはどう足掻いてもお前一人の身では足りん。鬼殺隊の力を俺達の持つ『記憶』と合わせて運用していく必要がある」
「それは俺も考えてました。でも記憶の事を打ち明けてもし信じてもらえなかったらそれこそ一巻の終わりだし、どうしたものかと考えてて……」

「その為の柱だ。これは珠世様とも話し合った事だが、我々にとつて唯一、お前の他に信用に足る人物として挙げられるのは、産屋敷耀哉だけだ。奴ならこの記憶の事も、そして珠世様の事を伝えても柔軟に受け入れてくれるだろうと判断した」

そうだ、お館様。あの人なら自分の話を信じてくれるかもしれないと思った。鬼を激しく憎みながらも、禰豆子と珠世を信じてくれるほどの大器である。

「俺達の現状は普通ならば荒唐無稽な話として処理される類いのものだ。だが柱であれば軽んじられる事はない。鬼殺隊全体に意見を通すだけの影響力を持つことができる。それに、産屋敷とも連絡が取れ易くなるだろう。そもそも今のお前の階級じゃ謁見すら許されんだろうしな」

また、柱になれば鬼殺隊の今後の方針を定める柱合会議に出席できるようになる。そこで自分の知り得る限りの知識を元に計画を固めて、最善の道筋で無惨討伐を行うことができれば万々歳だ。

柱になればこんなにも出来る事が増えるのかと、炭治郎は大いに納得した。目から鱗とはこの事だ。

入り口の方から物音がした。

「珠世様がお戻りになられたな。……じゃあお前は禰豆子を連れてさっさと鬼殺隊に戻れ。あと珠世様に挨拶していけ。くれぐれも丁寧にだぞ。粗相したら殺す」

◆

(俺が全てを話す事ができるのは柱になってからだ。それまではなんとか珠世さん達のことを隠し通さなきゃ！)

不機嫌そうな愈史郎と、困ったように自分を見遣る珠世の顔を改めて思い浮かべる。彼等を守るのも自分の使命だと何度も言い聞かせた。

ちなみに炭治郎の怪我が思いの外深手にならずに済んだのは禰豆

子のおかげだった。実は道具箱の中に隠れていた時から血鬼術を発動していたらしく、身体の内外に纏わり付いていた氷を『爆血』で消し飛ばしていたんだとか。

氷漬けになった隊士達から死人が出なかったのも禰豆子の働きがあつたからだろう。

そう珠世から説明を受けている。

ベッドの傍に置いてある道具箱に目を向ける。

自分はいつも妹に助けられてばかりだ。

「ま、なんにせよだ。この熱りが冷めるまでのらりくらり躲してこうぜ。伝えるのは出世の為の活躍話だけで十分だからな！」

「うーん、世渡り上手だなあ」

「へー何を躲すんですか？」

背後に立っていたのは額に青筋を浮かべた蟲柱 胡蝶しのぶ。二人の背筋を冷たいモノが伝う。音どころか視認することすらできなかった。

機を見るに敏。彼の行動は早かった。

「じゃっ、炭治郎達者でな！ 安静にしろよ！」

先輩（仮）は出口へと一目散に駆け出した。しかし丁度近くを通りかかったアオイに取り押さえられ、あえなく確保されてしまう。

「怖がる事はありませんよー。鬼を相手にしてる訳でもないんですから、少しお話しするだけでいいんです。で、炭治郎君。そろそろ私とお喋りしてくれる気になってくれると嬉しいのだけど」

炭治郎の苦境は続く……。